

ロレンソ了齋の豊後府内滞在の記録

ロレンソ了齋の生涯に沿って

生い立ちからフランシスコ・ザビエルとの出会い 1526年～1551年

ロレンソ誕生

1526年（大永6）（ロレンソ 25歳）

ロレンソ・肥前の國・白石（現・長崎県平戸市春日町白石）に生まれる。

長崎県平戸市にある平戸島の北部、現在、生月島と平戸島を結ぶ生月大橋が掛かる平戸島の山の下、海辺の小さな入り江にある白石という10軒ほどの集落に、1526年、体が弱く目の不自由な子が生まれた。片方の眼の視力はなく、もう片方の目で歩ける程度にぼんやり見えるだけであった。16・17世紀の日本では目の不自由な人々は、生まれた家の経済状態や教育の程度によって医者や音楽家、按摩師として生活し、時には身分ある人の相談役として選ばれることもあった。しかし、貧しい家庭（おそらく父は漁師だったであろう）に生まれたロレンソ（その姓は記されていない）には、ひとつの可能性しか残されていなかった。それは当時の他の貧しい盲人と同じように琵琶法師になることだった。琵琶を奏でながら、昔の武士物語（平家物語等）を唱えながら道を歩き、物を乞いながら生活することだった。時には仏教の教えに精通した雄弁な琵琶法師は、その宗派の伝道師として利用されることもあった。物心付くようになったロレンソは、近くの寺に預けられ、そこで寺の修行をしながら、琵琶の奏法を学び、また、預けられた寺の宗派の教理や他の宗派の教理、いくつもある仏教宗派の教理の違う点等を学んだと思われる。

後年1571年、ロレンソがフランシスコ・カブラル神父と共に、織田信長に挨拶するために岐阜まで行ったとき、信長がロレンソに向かって、宗教にかかわるいろいろな質問をした。ロレンソは尋ねられたことについて答えた後、神の正義と憐れみについて長い話をした。信長が、ロレンソが説明したことに賛同したので、そばにいた元僧侶であった友人は『ロレンソが神の教えのことをよく知っているのは神父たちが教えたのであろうから私は驚かないが、日本の諸宗派の秘儀について僧侶たちが大抵知らないのに、彼がこれほどよく理解している点において私は驚きます。』と述べている。このことから、ロレンソが、寺に預けられていた時に、仏教の諸宗派について学んでいたことが判るし、また、寺院から琵琶を奏でながら巡礼にでた時も、各地の寺院に宿を乞い、その所で各宗派の奥義について熱心に学び知識を積んでいたことが推測される。

ロレンソは幼いころ寺に預けられて将来の生活のために琵琶の奏法や演奏演目である武士物語等を暗記していった。字を書くことも読むこともできなかったロレンソは、ある日琵琶を背にして右手に杖をにぎり、故郷に別れをつげた。習ったばかりの物語を吟唱しながら、町から村

へ歩き、個々の家々の軒先で琵琶を弾き、さ迷い歩く巡礼の道にでた。ロレンソには神から他の盲人にはない才能がすでに与えられていた。『澁刺とした才気と大いなる見識、人並み以上に優れた知識と才能、理解力と恵まれた記憶力、非常に豊富な言葉を自由に操り、それらの言葉はいとも愛嬌があり、明快、かつ思慮に富んでいたのも、彼の話聞く者はすべて驚嘆した。』と後年、ロレンソによってキリシタンに導かれた人々の記録にロレンソの姿が描かれている。『山口には、片眼が全然見えず、他の眼はごくわずかしか見えない一人の盲人がいた。彼は日本での一般の習慣通り、琵琶で生計を立て、貴人たちの邸で奏でたり歌ったり、洒落や機知を披露し、昔物語を朗吟したりしていた。というのは、彼は、この点、盲人たちがたえず従事している按摩以外に、その澁刺とした才気や大いなる識見、また理解力と恵まれた記憶力によって、他の多くの盲人たちに抜きんでおり、好まれたのである。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第6巻 大友宗麟編Ⅰ
第4章(第Ⅰ部5章) 54～56頁

『ロレンソは、外見上ははなはだ醜い容貌で、片眼は盲目で、他方もほとんど見えなかった。しかも貧しく穢い装いで、杖を手にして、それに導かれて道をたどった。しかしデウスは、彼が外見的に欠け、学問も満足に受けなくて、読み書きもできぬ有様であったのを、幾多の恩寵と天分を与えることによって補い給うた。すなわち、彼は人並み優れた知識と才能と、恵まれた記憶力の持主で、大いなる靈感と熱意をもって説教し、非常に豊富な言葉を自由に操り、それらの言葉はいとも愛嬌があり、明快、かつ思慮に富んでいたのも、彼の話聞く者はすべて驚嘆した。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第1巻 織田信長編Ⅰ
第14章(第Ⅰ部38章) 169～171頁

『あの方(ロレンソ)は、片眼は見えず他の方の眼もほとんど何も見えませんし、まだ異教徒であった頃には生計を立てるために、手には杖を持ち背には琵琶を負い、家々で琵琶を弾き、そして機知に富んだ着想を語って歩く物乞いに過ぎませんでした。しかも彼は都地方の人ではなく、日本の片田舎である肥前の国の、しかも賤しい家の生まれでありました。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第2巻 織田信長編Ⅱ
第31章(第Ⅰ部79章) 93～99頁

三箇伯耆守頼照サンチョ殿が、その三箇の教会において、一司祭、一修道士、ならびに数名の高貴なキリシタン兵士たちの前で、都地方の改宗に関して行った説話のこと

平戸を出たロレンソは、琵琶を奏でながら旅を続ける。町から町へ村から村へ遍路を続ける。寺から寺へ歩みを進め、雨の日も風の日も、日々の食べ物を乞いながら、琵琶で生計を立て、貴人たちの邸で奏でたり歌ったり、洒落や機知を披露し、昔物語を朗吟したりして旅を続けていた。毎日が新しい出会いであり、新しい人々に出会い、それまで知らなかった仏教の他の宗

派の寺で説法を聞きその宗派の教理を学んだ。時には宿を共にした他の琵琶法師から、新しい物語を習いながら、ロレンソの使う言葉は徐々に上達していき、語彙も豊富になっていった。ロレンソの性格と人格は次第に強くなり、相手への洞察力も増してくる。このようにして、ロレンソは遍路を25歳の年、1551年（天文20）まで続ける。いつ九州から山口に海を越えて渡ったか判らないが、1551年には、ロレンソは山口近郊にいて、家々を物乞いして歩いていた。ロレンソの持っている仏教に関する理解力は群を抜けて素晴らしかったことが記録されている。『彼（ロレンソ）は公然と非常に学識のある仏僧たちや身分ある人々と論議し討論したが、かつてその誰からも論破されたことがなく、彼の説教によって幾千人もの人々が改宗させられた。いな彼の説教の大いなる説得力に打ち負かされ、傲慢で僭越な学者たちも彼の足下に跪き、彼から福音の聖なる教えを受け入れるに至った。ところで彼は、説教において泰然とし、力強く、堅忍不拔であったが、同様に彼は、生活の亀鑑という点でも、また信仰を弘めるにあたって、甘んじた果てしない困苦という点でも、はたまた彼が遭遇したひどい危険の中にあっても、つねに大いなる教化と模範を示したので、たとえ彼がキリスト教国の真只中におり、主なるデウスがヨーロッパにおいて、その僕たちに分ち給うたあの精神の中で教育されていたとしても、今の彼は以上の点では、その徳操においては、いささかも劣るところがないのである。そのみか彼が有徳の人であることは、彼を傍に置いている司祭たちがつねに大いに景仰してやまぬところであり、今でも（彼はすでに65歳を超え、日本のイエズス会で40年間堪えてきた苦勞のために、もはや病み、かつ弱っているけれども）下の地方のドン・バルトロメウ（大村純忠）の領内におり、必要ならば日中、二、三回はキリシタンや異教徒たちに説教をし、福音の説教師としての職務にいそしんでいる。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第6巻 大友宗麟編 I

第4章（第I部5章）54～56頁

司祭たちが山口に帰還した後、この地で成果を生み始めた次第

1549年（天文18）8月15日、フランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier）は、コスメ・デ・トーレス（Cosme de Torres）、ジョアン・フェルナンデス（Juan Fernandez）と共に、日本人ヤジロウという薩摩出身の武士と2人の仲間の案内で、鹿児島島の稲荷川の港に着いた。

1550年（天文19）9月始め、鹿児島での布教をあきらめ、市来を經由して肥前の国・平戸に移った。当時の平戸は支那との交通・貿易の要路であり、ポルトガルの船もすでに入港していて、ザビエルの名声は一般にも知られていたから大いに歓迎された。領主・松浦隆信もまたザビエルを優遇してキリスト教布教の許可を与えたので、わずか20日たらずで、鹿児島島の1年間よりも信者になった者が多かった。10月末、平戸に生まれたばかりのキリシタン教会をトーレス神父に委ね、ザビエルはフェルナンデスと鹿児島島で受洗したベルナルドという青年と共に都に向かった。博多から都へ行く船を捜したが、都合の良い船が無かったので、11月の中旬、当時瀬戸内第一の都と呼ばれていた領主・大内義隆氏の居城である山口へ向かった。この時期

は大内氏最盛期の時代だった。ザビエル一行は約 1 ヶ月滞在して、街頭に立ち説教をしたが、この時信仰に入る人はきわめて少なかった。クリスマス 1 週間前、12 月 17, 18 日頃に山口を発ち、都に向かった。周防の岩国から船で堺まで行った。船に乗り合わせていた乗客から、堺の豪商日比屋了慶を紹介された。彼は後にディオゴの霊名をうけ、五畿のキリシタンの発展にとっては無くてはならぬ人物となり、キリシタン教会を支える大きな柱となった。

1551 年 1 月（天文 20） ザビエルは都での布教という大きな希望を胸に都に入った。

当時は御奈良天皇の在位中で、将軍は足利氏第 12 代・足利義輝だった。

応仁の乱後、京都は打ち続く戦乱のために、满目荒涼として綱紀もゆるみ、そのうえ、細川・三好両氏の争乱はいつ果てるともしれず、キリスト教の道を説く余裕は皆無だった。天皇および将軍から勅許をえたいとの願いはザビエルが日本での伝道を思い立った時からの宿願であったが、この京都の荒廃を見てザビエルの夢は消えうせた。都に 11 日滞在したが何もできず、このことを通して天皇および将軍の実力の程も初めて知ることとなった。しかし、ザビエルは失望することなく新しい計画を立てた。「日本における最も有力な大名は、やはり山口の大内氏である」ことを認め、平戸に戻り、平戸の教会に残していた荷物を持って、1551 年 2 月、再度、山口に向かった。

山口におけるフランシスコ・ザビエルとの出会い

1551 年（天文 20）

1551 年 4 月、ザビエルは領主・大内義隆に接見を依頼して、天皇に奉呈するために用意していたインド総督とゴアの司教の親書の他に、贈り物として 13 種類の日本人が見たことのない、望遠鏡、*ヴァージナル【鍵盤楽器】、置き時計、ギヤマン【ガラス製】の水差し、鏡、眼鏡、書籍、絵画、小銃等を持参した。義隆は非常に喜んで、非常に機嫌よく、ザビエルの錦織の祭服を眺めて『生き仏のようにみえる』と嘆賞した。

*『13 ノ琴ノ糸ヒカザルニ 5 調子 12 調子ヲ吟ズル』と日本側の記録に見える楽器は、ポルトガル語の『クラヴォ Cravo』英語で言う『ヴァージナル Virginal』である。

大内義隆はザビエルの贈り物に対する御礼として黄金一箱と太刀を贈らんとしたが、ザビエルはこれを辞した。その代わりに、神の道の伝道を許可くださるよう願った。義隆は大いに感激して、神の道を説くことを許可し、信仰の自由を認め、かつ彼ら海外からの宣教師を排斥することを固く戒めた立札を、直ちに山口の町の角々に立てた。その上、ザビエル一行の住宅と教会にするために、当時すでに廃寺となっていた大道寺を与えた。ザビエルらは大いに喜び、その日以来、毎日 2 度、ザビエルはフェルナンデスを通訳として、殿の小路の街角にある井戸の縁石に腰を掛け、集まった群衆にキリストの道を説いた。あらゆる階級の人々が集まり、また教会である大道寺には、昼夜問わずにキリスト教に関して質問に来る人々が多くなり、ザビエルたちは全く休む暇がないくらいに忙しかったが、しかし信仰を受け入れる人は依然として少なかった。

ある日いつものように、街角に立ちフェルナンデスは聴衆に囲まれながら説教をしていた。するとその説教を聞いていた一人の青年が嘲り笑って、彼の話妨害して、ついには彼の顔に唾を掛けた。しかしフェルナンデスは、少しも騒がずに、静かにハンカチを取り出してそれを拭き、話を続けた。その様子を見た青年とその周辺の人たちは、彼の忍耐とその努力が一通りのものでないことを初めて知った。特にその青年は説教の終るのを待って、彼らの教会に行き、罪を悔い改めて洗礼を受けた。彼は後に有力な山口の信者になった。

ザビエルは1551年7月、山口の伝道の成果について書簡で述べている。

山口の布教2ヵ月で、約500人の信徒を得たが、それら改宗者の中にはザビエル一行の宿泊していた家主とその親戚の人々もいて、『日本で初めてこのように痛快を感じ、生まれてこのかたこのような喜びを覚えたことがなかった。』

500人の改宗者の中には教義に服して信仰に入ったというより、その中の武士および学者たちは、ザビエルが説いた学説、特に天文学上の理論に感心して入信した人も多かった。

『日本人は他国の人より賢く、道理の解る性質を持っている。学問を好むが、まだ地球の丸い事とその運行の理を知らない。我らが天体運行や雷電の起こる理を説明すると、彼らは熱心にこれを聴いて、我等を尊敬する気持ちになった。我等は学問の方便によって、宗教を悟らしむことを得た。』

『彼【ロレンソ 25歳】は、異国人たちがその市（山口）で新しい宗教を説いていることを耳にしたので、司祭を訪れる決心をし、事実訪問した。彼は司祭に自らの疑問を提出し、その答弁に接して満足した。そして回を重ねるごとにその聖なる教えを受け入れることができるようになったので、メストレ・フランシスコ（フランシスコ・ザビエル）師は、十分教えこんだ後に彼に洗礼を授け、ロレンソの名を与えた。司祭の愛情は彼の心を獲得した。司祭たちが、幾千里もの遠くから多大の困難、危険、労苦のもと、ただ人々の靈魂を強化しようとの目的でなんら現世的な利害を求めずに日本へ渡ってきたその大きな企ては、彼を非常に感動させるに至り、彼は、物語をし、琵琶を弾き、朗吟したりして人々を楽しませる仕事で生計を立てていたのを断念し、自分の性質に応じてできそうな任務で我らの主なるデウスに奉仕するために、教会に一員になることを決意した。そして全能なるデウスは、栄光の使徒パウロの言葉どおり、強き者を辱めんとしてきわめて低く賤しき者を選び給うたように、同じ主は、ほとんどまったく視力を失い、生まれつき非常に滑稽な容貌のこの男を選び、日本における最初のイエズス会修道士として受け入れることを嘉し給うた。しかも同時に主なるデウスは、彼をその聖なる福音の宣布者、また都の市ならびに他の近隣諸国におけるカトリックの教えの最初の弘布者に選び給い、主は彼に満ちあふれるほどの恩寵を授け給うたので、彼は今までにイエズス会が日本で有したもっとも重要な説教者の一人となった。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第6巻 大友宗麟編 I

第4章（第I部5章）54～56頁

司祭たちが山口に帰還した後、この地で成果を生み始めた次第

ロレンソがザビエルから洗礼を受けた時期については、1551年5月頃から、トーレス神父が平戸から山口に赴任する9月10日までの4ヵ月の間のことと考えられる。

『ロレンソ』という名前は、洗礼の時にフランシスコ・ザビエルが与えた名前で、ロレンソの日本名【本名】は判っていない。『了齋』は【齋名】すなわち修道生活に入ってから選んだ名前である。出家する人の習慣に従ってイエズス会に入った日本人はしばしばそのようにした。

大道寺に訪れる人々の数は増え、教えを受ける人々の数も増した。その中であって、ロレンソはザビエルを模範にして、ザビエルから直接に教えと指導を受けながら、フェルナンデスの助けも受けながら、キリスト教教理の学びを深めた。新しい信仰についても知識を増し加えると同時に、修道生活を学びながら祈りの生活を味わう日々が続いていた。この時期から、カトリック教理の学びと共にグレゴリオ聖歌を習い歌い始めたと考えられる。ザビエルの指導の下の数ヵ月の共同生活で修道士の道とは何なのかを学び、使徒職の熱意も受け取ったロレンソは、フェルナンデスの語る説教や教理の教え方などのすべてがロレンソの以後の伝道の仕方の基礎になった。またフェルナンデスはすべてにおいて何でも話し合える主にある兄弟でもあった。

ロレンソも加わったザビエル版『ドチリナ』の訂正

ザビエルが1549年8月15日に鹿児島に上陸した時、日本における宣教のために既に一種のテキストができていた。マラッカで初めて日本人に会った時、今まで知らなかったこの民族が、高度な文化を持っていることがわかった。薩摩出身のアンジロウと二人の彼の友を連れてゴアに行き洗礼の準備を受けさせるとともに、日本に布教に行く計画をたてた。この時、ザビエルが常に教理説明に使っていた「ドチリナ」を、アンジロウの手を借りて日本語に翻訳して準備をした。

ザビエルが参考にしたバロシュ (Joao de Barros) 著の33ヵ条のドチリナは幼児教育のために編成した文法書の付録だった。バロシュのドチリナに、ザビエルはインドの現状に合わせるために手を加えて29ヵ条とした。この29ヵ条のドチリナはザビエルの宣教の基礎となりインド、インドネシア、マラッカで使用され、また各地方の言葉に翻訳された。

日本に持ってきて使用したザビエルのドチリナは、翻訳文も未熟で、宗教用語に仏教用語を使用していたので混乱が生じ、山口で用語の改正を行い、キリスト教の神の概念を表わすために『神』をラテン語の『デウス』と表現した。この時の改正に、当時、山口にいた宣教師団の中で、ただ一人の日本人である仏教用語に詳しいロレンソの知識が生かされた。

日本に来た時には説教用のテキストができていたが、同年冬、ザビエルはさらに詳しい教理説明として、天地の創造、キリストの生涯から最後の審判に至るまでの、いっそう詳しい説明を翻訳してもらい、それをローマ字で書いて一冊の帳面にまとめて、それを群集の前で朗読することにした。アンジロウが翻訳した教理書の中で使われていた宗教用語は仏教用語であったために非常に多くの誤解を招き、説教を聞いた仏僧には新しい仏教の一派と思われた。

ザビエルがバロシュ (Barros) の33ヵ条のドチリナを訂正して29ヵ条とした。

この 29 カ条の「ドチリナ」のアンジロウーの翻訳文もかなり未熟だったし、使用された仏教用語からくる混乱や混同が、群衆への説明の明確さを欠いていることがザビエルには判りだした。山口において、ザビエルはこの「ドチリナ」の訂正を決めた。ザビエルに訂正を進言したのはロレンソであった。その頃のザビエルの宣教師団の中で、仏教用語に精通しているのはロレンソ只一人であり、正確な日本語に出来る唯一人の日本人でもあった。このことから、山口での 29 カ条の「ドチリナ」の修正にはロレンソが関わっていたと考えられる。この時のロレンソの「ドチリナ」の修正作業に携わった経験が、次の 1555 年にガーゴ神父が平戸において著わした 25 カ条の「ドチリナ」改正の時、再度、仏教用語に詳しいロレンソが起用されたことと決して無関係ではない。

ザビエル、山口より豊後府内へ行く

8 月の終わり頃、豊後の国・府内より、ザビエルに宛て 2 つの書簡が届いた。府内の沖の浜にザビエルの友人デュアルテ・ダ・ガマ (Duarte de Gama) の船が入港していた。ポルトガル人からザビエルが山口で布教活動をしているとの噂を聞いた豊後の若い大名、大友義鎮【後の宗麟】は、ザビエルに招待状を送った。ザビエルは『ポルトガル人の友人に会うため、また、大名がキリシタンに成りたいのかどうかを確かめるために』、数日の間府内に行こうと決心した。ダ・ガマの船でインドからの手紙も届いているだろうと期待していたからでもある。

トーレス神父、平戸より山口に赴任する

9 月 10 日、ザビエルは、自分の留守中の山口の教会の世話をするために、トーレス神父を平戸から呼び寄せた。トーレス神父が 9 月 10 日に山口に着くと、ザビエルはベルナルドを連れて豊後に赴いた。ザビエルが期待していたインドからの便りは届いていなかった。ザビエルは大友義鎮との会見後、いったんダ・ガマの船でインドに帰り、そこでの状態を見て翌年に日本に戻るといふ計画を立て、それを山口のトーレス神父に伝えた。その後、11 月 20 日、ザビエルはダ・ガマの船でインドに帰るために日本を後にした。大友義鎮は一家臣を使節としてザビエルに同行させ、ポルトガル国王宛の手紙と国王へ贈呈する具足とを携行させた。この使節はやがて入信して、ザビエルからロレンソ・ペレイラと命名してもらった。彼の本名は正確にはわかっていない。

コスメ・デ・トーレス (Cosme de Torres) 神父

『善良な年寄り』と親しみを込めて、部下の宣教師たちとすべてのキリシタンたちから呼ばれていたトーレス神父は、深い祈りの精神、使徒職への熱意を内に秘めて、日本の初期キリシタン教会の布教の舵を取っていた。彼の人柄は温厚で控えめで忍耐強かった。日本人の特性をよくわきまえて日本の習慣を学び、日本に順応するために衣食住のすべてを日本風に変えて、日本の行儀作法を行ったので、日本人から好感を持たれた。日本の布教は日本人の中から聖職者を育成して、将来において日本の宣教を任せるべきとの信念を持って布教に当たった。誕生し

たばかりの日本の教会のために、新しい働き人の養成に全力をあげ、部下の仕事を注意深く指導し、自分の力の許す限り与えられた教会の司牧に努力したトーレス神父の生活そのものが、一緒に生活していた人々への手本であり、すべてのキリシタンたちの崇敬の的であった。宣教においてトーレス神父は戦うことを知っていた。山口、平戸、博多での布教の成果が破壊されて、豊後の地の避難場所に逃れたが、彼は自分が敗北したとは思ってはいなかった。神の定めた時の来ることを知っていて、ひとたび道が閉ざされたと思う時でも、神が必ず道を開かれると信じて、閉ざされている期間には、自分に与えられた人々の教育と指導に自らの身を持って示し尽力した。強固な精神力と忍耐強さを内に秘めて、トーレス神父は9年と数ヶ月を過ごした。トーレス神父の許で宣教の訓練を受け、トーレス神父の模範的生活を見て育った宣教師たちは、完全に信頼できる伝道者となり、次の時代の日本の教会の急速な拡大の礎となった。

トーレス神父は日本布教長を18年務め1570年（元亀元）天草の志岐で死去した。この時、信者数3万人、教会数50であった。トーレス神父はザビエルの開拓したキリスト教を日本に根付かせ教会の基礎を固め、将来における興隆の基を築いた。

『府内で彼（トーレス神父）と一緒に生活していたイルマンたちは、彼の生活や模範によって深い感化を受けていたから、大きな苦労や窮乏が生じて、それを軽微で忍びやすいことと考えていた。』

*Luis Frois, “Historia”, I, cap. 19.

『神父様（トーレス）は毎日ミサを捧げています。神父様は10年以上、病気でもミサを捧げることをやめずに続けています。ただ数回だけ持病のためできなかったことがありますが、彼の持病は時にははなはだ粗略に扱われています。しかし今は、日本の薬の中に良いのを見つけて時々それを服用し、健康は非常に良くなっています。私たちおよび日本のこれらの地方のキリシタンや異教徒にとって、彼の生命は極めて貴重なものでありますから、神がこれを延ばし給わんことを』*Cartas I, 78.

『すでに老年であり、仕事や贖罪によって体が弱っているにもかかわらず、コスメ・デ・トーレス神父の生活は、その多くが心の祈りにあてられ、そのために毎日何時間もが費やされた。太っているし身長も高いのに、食事は非常に質素で常に粗末で味のない物を食べていたが、それは他の人にとっては絶えざる断食として役立つほどのものであった。日本の寒気は非常に厳しいものであるのに、彼が体を暖めるために火に近づくのを誰も見たことがないし、貴人を訪ねる時のほかはほとんどいつも帽子をかぶらず、素足でいた。』

『毎日ミサを捧げることを大きな慰めとし、立っていることができないほど体の悪い時には、祭壇によりかかたり、時には膝をついてとなえた。』

『決して昼間眠ったことがなく、常になすべき仕事をしていた。夜は連袴や聖務日課をとこなえて黙想した後に、イルマンと共に小麦をひいた。家の仕事をするとき、一番先に棒や石を運ぶのは彼であり、こういう仕事で示す彼の力は二人分あった。』

『(豊後の修院で) 九時半以後、全員が良心の糾明を行っている時に、神父は翌日観想すべき点をイルマンに指示した。皆が眠ったと思われるころ、毎夜欠かさず火を点じた燭台を持って静かに自分の部屋を出て、修院で教育を受けている少年同宿の部屋を訪ね、風邪をひかないように彼らに寝具をかけた。それから台所へ行って、従僕の不注意で鍋やフライパンが汚れたままになっていたり瀬戸物類が洗ってないと、井戸から水を運んで、これらをことごとく洗った後、それぞれの場所に収めて台所を掃除した。それから木材やそのほか修院に必要なものを運搬する一、二頭の馬のいる馬小屋へ行って、もし汚れていれば掃除し、夜の飼料を与え、水を運んで飲ませた。それから修院内の各所や扉を見回った後に、自分の部屋に戻った。こうした仕事にもかかわらず、祈りのために起床するのは早朝であった。』

* Luis Frois, "Historia", I, cap.19.

トーレス神父は、信者であるキリシタンだけでなく、彼を訪ねてくるすべての人々に分け隔てなく公平に接している。彼の持っている公平無私の姿が人々の心を打ち相手に尊崇の念を抱かせていた。トーレス神父はキリストに仕える様に人々にも僕のように仕えていた。

『彼(トーレス神父)は、涙という、神から授かった特別の恵みをもっていた。だから、神父やイルマンが遠方から来た場合だけでなく、何ヵ月か前に訪ねてきたことのある近くのキリシタンが来た時でも、彼らを迎える最初の挨拶は涙を伴っていた。それにもかかわれず誰にとっても、その涙は煩わしいものではなかった。人との対応においていささかも憂鬱や悲しみの色は示さず、反対に喜びと笑みを浮かべ、また日本人の性格にぴったりと合った慎みや宗教的円熟さを伴っていたので、すべての人々の心を捕らえ、彼らの靈魂の幸せのためにしたいと思うことを彼らに説得することができた。』

『神は深い思慮と、この地の改宗の仕事を巧みに処理する方法についての高度の知識を彼に与え、また異教の貴人たちと交際し、その心を捕らえる特別な能力を与えたもうた。日本の貴人たちは尊大であり、彼らの名誉の程度を表わす無数の儀式儀礼を有するので、彼らとの対応の方法を彼がこれほどよく知り、一人ひとりとの面目・礼儀を守るのを見て彼らは感嘆した。』

『あらゆる愛の仕事に適した偉大な心の所有者であると同様に、たびたび彼に加えられた侮辱、不名誉、軽蔑を耐え忍ぶのに特別な忍耐を持っていた。人びとから加えられる不当、理不尽なことにも顔色を変えなかった。キリシタンがしばしば彼らの風習として、とるに足らないことに長々と理屈を並べてはなはだしく煩わしい思いをさせたが、それを楽しげに聞いて彼らを喜

ばせるように努力した。』

初期キリスト教団における日本音楽との相違

日本に 1549 年に来たフランシスコ・ザビエル、コスメ・デ・トーレス、ベント・フェルナンデスの 3 人は、インドゴアで行われていた、豊かな伝統のある典礼のための音楽を経験して知っていたし、日本での教会の内外で日本人の心に届くような旋律のある曲を携えて来日した。彼らが携えてきた旋律や俗謡は、日本人には耳慣れないものばかりであったが、創立当初の教会内では好評だった。1552 年 12 月の降誕祭前、日本に到着したばかりのバルタザール・ガーゴ、ペドロ・デ・アルカソーヴァ、デュアルテ・ダ・シルヴァ、の 3 人が豊後から山口に来て、オルガンもない状態の中、歌付降誕祭のミサを挙げることに決めた。この降誕祭の歌付ミサは、日本で初めて行われた歌付ミサである。12 月 25 日、日本にいるすべての宣教師たちが山口に一堂に会し、この年のクリスマスは出来る限り厳粛に執り行われた。

『雄鶏のミサは以下のように歌ミサが挙げられた。コスメ・デ・トーレス神父はミサをたて、バルタザール・ガーゴ神父が助祭としてアルバとストラを重ね着して、福音書と書簡を朗読し、我々 3 名のイルマンは歌って応誦した。降誕祭の日、我々はミサを歌い、良い声ではなかったが、これを聴いてクリシタンらは皆、深く慰められた。同夜は終始、キリストの生涯（についての書）を読み、二人に司祭が六回ミサを執り行い、これを行った理由を説明した。そして、日本人たちは、我々が歌うことは不快である、と言っているけれども、クリシタンらが神の事柄に抱いている敬愛の念が。我々に歌を彼らに気に入らせたようだ。この様にして彼らは篤い信心を持ってミサを聞いた。』

*1554 年、ペドゥロ・デ・アルカソーヴァ修道士の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 III 期第 I 巻 110 頁

『我々はクラヴオ、ヴィオラ、フルート、オルガン、ドセイン等の旋律によって愉快になる。日本人にとってはわれわれの全ての楽器は、不愉快と嫌悪を生じる。我々の間では多声による音楽は良く響き、快感を与える、日本は皆が声を合わせてわめき、ただ戦慄を与えるばかりである。ヨーロッパの国民はすべて声を振るわせて歌う。日本人は決して声を振るわせない。我々はポリフォニーに合わせて歌う時の協和音と調和を重んじる。日本人はそれをカシマシと考え、一向に楽しまない。ヨーロッパでは、少年は大人より一オクターブ高い声で歌を歌う。日本では高音部の音階が欠けているので、すべての人が同じ音階でわめき歌うのである。』

*ルイス・フロイス著『ヨーロッパ文化と日本文化』173～174 頁

1563 年（永禄 6）日本に来たフロイス神父は、ヨーロッパの音楽と日本の音楽が違っていること、その演奏法も共通点が少ないことを描写している。

教会内で受容された日本の音楽

自分の持っている伝統を失うことなく、新しいものを取り入れるという日本人の特質が、音楽の革新をもたらした。後から日本に来たフロイスもホセ・マリア・ヒロネリヤも日本人の音楽は彼らにとって耐えがたく耳障りと感じた。初めて 1549 年にザビエルと共に日本に来たコスメ・デ・トーレスは、日本の音楽は確かに自分の知っているヨーロッパの音楽とは異質な音楽と感じたが、それでも、日本の旋律と歌唱法を受け入れる用意があった。特に教会に琵琶法師だったロレンソを受け入れてからは、トーレス神父はロレンソとの日々の交わりのうちに、民衆の音楽によって日本の神話も世俗の物語も、すべて世代を超えて忠実に伝承されていることに気付かされ、この日本の環境に適応していくための最初の措置を講じた。それゆえに、ロレンソの特技である琵琶の演奏を教会の中に取り入れた。教会の中ではグレゴリオ聖歌を典礼に即して歌っていく。ロレンソはグレゴリオ聖歌に日本独自の 5 音階旋法を当てはめて伴奏を作っていく。これこそ、西洋音楽と日本音楽とがひとつに融合した瞬間であった。グレゴリオ聖歌の旋律を支える日本の琵琶の伴奏。二つの文化が邂逅した結晶として生まれ出た音楽だった。

歌による公教要理

スペインのイベリア半島出身の宣教師たちは、平易なリズムと親しみやすい旋律による教理伝達になれていたため、日本の伝道にもこれら歌による教理問答を示した。これは『ドチリナ・La doctrina』と呼ばれて、典礼を補佐する役割があった。教会の中において唯一人、琵琶法師時代に歌っていた日本の全ての俗謡に精通していたロレンソが、教理に合うであろう旋律を選び、ロレンソと、詩歌に秀でた日本人たちが、教理文体の叙述を歌に合うように音律を整える作業を経て、教理要綱を歌で平易に歌えるように整えたと考えられる。読み書きができない人々が多い文盲の多い時代、教理の暗証はまずは口頭でなされるのが普通であった。木版印刷による本の不足は、文字が書けるキリシタンたちが、自分達の手で書き写して不足の分を補った。教会の教理要綱は、キリシタンたちが理解した後に、彼らの流儀で作られた韻文と吟唱が採用されて宣教師たちの非力を補った。このことは初期の宣教師の書簡に繰り返し出てくる。日本の音楽を取り入れることで、聖書のテキストが、教会に初めて来た人たちにも、キリシタンたちにも容易に記憶され、より良く染み通った。

『当地（豊後）では主の降誕祭ははなはだ荘厳に行われる。というのも、アダムからノアまでの物語のような新約・旧約の両聖書中の玄義を多数劇にして演じるからである。その物語は日本語の韻文に訳され、キリシタンはこれをほとんどすべて暗記し、行列で歩くときや祝祭において歌う。これは当地の人々が異教の歌を捨て、主の歌を歌うために取りうる最良の方法の一つであり、かくして彼らは聖書の大部分を暗記するようになる。このことは彼らがいつそう信心を深めるうえで大きな助けとなっている。』

*1564年10月9日付け 豊後発 ジョバンニ・バティスタ・デ・モンテ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第2巻239頁

『降誕祭の晩餐は他の地方で通常行っているようなものではなく、夜に公家らが喜びと信心から、聖書中の多くの物語について詩を作って歌った。』

*1566年1月30日付け 堺発 ルイス・フロイス神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻85頁

山口での陶晴賢の反乱

9月28日 ザビエルが豊後に赴いて10日あまり後、大内義隆の家臣・陶尾張守晴賢の乱が勃発した。陶晴賢は武断派の重鎮であったが、大内義隆より日頃から心好きからぬ扱いを受けていた。晴賢は徳佐口より、江良丹後守は防府口より山口を目指して攻め寄せたので、義隆は流泉寺に移って防いだが力及ばず、一旦九州に逃れるため大津郡仙崎の浜から船を出したが、波浪のために進めず、深川大寧寺に引き返して自害して果てた。

この内乱の時、トーレス神父とフェルナンデス修道士は友人であった内藤興盛の保護下にあった寺に身を寄せ、その後、陶晴賢と手を結んでいた内藤の屋敷にかくまわれた。その時ロレンソがどこに避難していたのかは明らかではない。おそらく有力なキリシタン信者のもとに身を寄せ、その家族と共に疎開させられていたと考えられる。大道寺はこの内乱の戦火で焼失した。

大内義隆が自害した後、陶晴賢はかねてからの密約通り、豊後の大友義鎮（宗麟）の実弟・八郎晴英（はるふさ・大内義隆の姉の子）を迎えて大内氏の跡を継がせた。

信仰と使徒職への入門と訓練の時代 1552年～1559年

1552年（天文21）（ロレンソ26歳）

1552年2月、大友八郎晴英は実兄大友義鎮【後の宗麟】の止めるのも聞かず豊後を発って3月3日周防山口に入り、名を義長と改めて、陶晴賢の後ろ盾のもと、荒廃した山口の街の復興に乗り出した。義長が豊後にいる時に、豊後に滞在していたザビエルは、もし義長が山口に赴くことがある時には山口のキリシタン信者を保護するように依頼していたから、義長が山口の新しい領主として赴任したことは、トーレス神父、フェルナンデス修道士にとって大いなる希望と力を与え、山口のキリシタンたちもキリスト教会も活気付いた。

8月28日付けで、新しい領主・大内義長は、トーレス神父の懇請により、かの有名な*裁許状を与え、彼らに教会の再建築と伝道の自由の許可を与えた。

9月16日、大内義長より大道寺を受ける

山口に平和が戻り、領主・大内義長より大道寺を受ける。その後5年間、義長の庇護のもとに、トーレス神父たちは布教を続けた。内乱の後、ロレンソも教会に戻り、トーレス神父の指導の下修道生活にもどった。ザビエルに代わりトーレス神父がロレンソの新しい指導者、霊父となった。トーレス神父は、ロレンソの粗野な姿の奥に隠されている、神が与えたもう才能を見出

し、ロレンソを神の器として、一人の宣教者として日々育てていく。

【推論】

ロレンソはトーレス神父の指導のもと修道生活を始めた。山口の教会に於いての組織的教理の学び、説教の方法、仏教とキリスト教の比較宗論の方法、グレゴリオ聖歌（教会音楽）等、修道士の学びに修練するかたわら、実践的に伝道に携わり説教をしたり教理を教えたりした。

また宣教師たちの話すポルトガル語を理解して、通訳が出来るまでに上達していった。

この時期、山口の教会には楽器が無く、グレゴリオ聖歌を歌う時は斉唱していたと考えられるから、ロレンソはグレゴリオ聖歌の旋律を覚える時に、ロレンソの得意とした琵琶で独自に伴奏を付けてグレゴリオ聖歌の旋律を暗記していったと考えられる。ただ単にグレゴリオ聖歌の旋律を繰り返し歌って暗記するのではなく、ロレンソの得意とする琵琶で伴奏を付けることによって、ロレンソは明確に、旋律の中の重要な言葉に対しては、その言葉の意味する内容を把握して、それを音に置き換えて琵琶で表現している。毎日繰り返すグレゴリオ聖歌の歌『主の祈り・パーテル・ノステル **Pater Noster**』『天使祝祷・アヴェ・マリア **Ave Maria**』『信仰宣言・クレド **Credo**』『めでたし天の元后・サルヴェ・レジナ **Salve Regina**』等にロレンソは自分の感性で伴奏を付けて歌うようになったと考えられる。毎日教理を教える時に、何度も伴奏を繰り返すうちに、やがてロレンソの中で作り上げた伴奏が固定化していき、教理【後のドチリナ・キリシタン】を学びに来た人々に『主の祈り』『アヴェ・マリア』『クレド』『サルヴェ・レジナ』等を教える時にも、ロレンソは琵琶で伴奏を付けて教えていたのではないだろうか。

ルイス・デ・アルメイダ、トーレス神父を訪ねる

この年の初め、ポルトガル人の医者で商人のルイス・デ・アルメイダ（Luis de Almeida 1525～1583）がトーレス神父と話すために山口を訪れた。アルメイダはデュアルテ・デ・ガマの貿易仲間として、またその船の医者として成果を上げていた。この時の出会いで、ロレンソとアルメイダは知り合い、生涯友として共に宣教の道を歩むことになる。

9月、ザビエルがマラッカから派遣した新しい宣教師たち、バルタサール・ガーゴ（Baltasar Gago）神父と二人のイルマン、デュアルテ・デ・シルヴァ（Duarte de Silva）とペトロ・アルカソーバ（Pedro de Alcacova）の3人が、通訳の日本人アントニオと共に、ゴアから鹿児島を経て豊後府内に到着した。大友義鎮の使節として、ザビエルと共にゴアに向かったロレンソ・ペレイラも一行とともに帰国した。豊後府内に着いたガーゴ神父は山口にいたトーレス神父に到着の報告を出し、トーレス神父の返事を持って、日本語の堪能なフェルナンデス修道士が、豊後に新しく到着した宣教師たちの手助けと通訳を兼ねて派遣されてきた。

12月3日、ザビエルがマラッカから派遣して豊後府内で布教活動をするために準備していた新

しい宣教師たち、バルタサール・ガーゴ (Baltasar Gago) 神父と二人のイルマン、デュアルテ・デ・シルヴァ (Duarte de Silva) とペトロ・アルカソーバ (Pedro de Alcacova) の3人が、トーレス神父に挨拶するために山口に到着した。

12月25日、日本にいるすべての宣教師たちが山口に一堂に会し、この年のクリスマスは出来る限り厳粛に執り行われた。**日本で初めて行われた歌付のクリスマスミサ。**

『降誕祭の日、我らはミサを歌い、良い声ではなかったが、これを聴いてキリシタンらは皆、深く慰められた。同夜は終始、キリストの生涯 (についての書) を読み、二人に司祭が六回ミサを執り行い、これを行った理由を説明した。』

*1554年、ペドゥロ・デ・アルカソヴァ修道士の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第III期第I巻110頁

このクリスマスミサ(降誕祭)がラテン語による『歌ミサ(ミサ・カンターダ Missa Cantada)』であったことを、上記のアルカソーヴァ修道士が書簡に書いている。

歌ミサとは、典礼式文が唱えられた後に、グレゴリオ聖歌やポリフォニー音楽が歌われる、音楽付のミサの事である。日本にザビエルがキリスト教を伝えた当初のミサは、典礼式文を唱えるだけの読唱ミサ (Missa Lecta) であった。この**1552年**の山口での**クリスマスの歌つきミサ**が、現在までにイエズス会会報で確認される、正式な音楽付ミサの最初のものと言える。

降誕祭の後、トーレス神父は日本における最初の宣教会議を開いた。この会議においてトーレス神父は全員の任務を次のように決定した。

豊後派遣組。 ガーゴ神父とフェルナンデス修道士は豊後府内に行き教会を開く。

1553年2月4日、豊後府内に向け山口を出発。アルカソーヴァが同行した。

山口残留組。 トーレス神父とシルヴァ修道士とロレンソ。山口教会を成長させていく。

アルカソーバは山口、平戸、豊後の三か所の宣教場所を回った後、日本の状況を説明するためにゴアに報告に戻り、日本のために新しい宣教師を要請する。

日本語に堪能なフェルナンデス修道士をガーゴ神父に付けたことで、トーレス神父が豊後での布教を進展させる狙いがあったことが判る。フェルナンデスを手放したことは、すでに、ロレンソとシルヴァが、日本語がうまくなかったトーレス神父の通訳として活動していたことを示している。

『同宿』という言葉はまだ使われていなかったが、ロレンソの働きを見れば日本の教会で立派な活躍をした最初の同宿となった。この時期、トーレス神父の指導のもとにロレンソは伝道士、修道士、祈りの人として育てられた。当時ロレンソと共に生活した仲間であるガーゴ神父、アルカソーバとデュアルテ・シルヴァは短い言葉でロレンソの横顔を紹介している。

アルカソーバ修道士はゴアに帰った後、1554年3月の手紙の中でロレンソを描いている。

『私に以上の事柄を伝えたコスメ・デ・トーレス神父とデュアルテ・ダ・シルヴァ修道士は山口にいる。司祭はすでに（日本の）言葉をいともよく理解するが、修道士も言葉をよく学んで、いるので、一年経てば話すようになるであろう。彼らには一日本人（ロレンソ）が同伴しており、ごく僅かしか目には見えないが、デウスの教えを甚だよく暗記し、司祭にとって非常な助けとなっている。すなわち、司祭が大いに議論する時には、直ちに彼を用いるのであり、彼はデウスのことどもを語る上で深い思慮と言葉を有するが故に、司祭が日本人と論議することを可能ならしめているのである。当山口の市には1500名以上のキリシタンがいるであろう。彼らと交われば、私が恥入るほど善良である。』

*1554年 ペドゥロ・デ・アルカソヴァ修道士書簡

『16・17世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第Ⅰ巻120頁

ペドゥロ・デ・アルカソヴァ修道士が滞在した1552年および1553年の日本についての幾つかのこと

トーレス神父と共にロレンソの指導をしたガーゴ神父の言葉。

『コスメ・デ・トーレス神父も山口において、やはり説教をなす別の日本人（ロレンソ）を擁しており、司祭は彼を通じて必要なことを話し、人々に言葉を伝えている。（同日本人・ロレンソは）理解があってはなはだ賢く、言葉が流暢で、デウスのことや日本の宗派に精通し、ジョアン・フェルナンデス修道士が書いたことが理解されうるように、諸本の文章を訂正する。しかしながら、日本人はジョアン・フェルナンデス修道士が話すのを聞くとたいそう喜ぶ。それが新奇なことだからであり、彼が（日本の）言葉を喋るさまを見て驚嘆している。言葉が発せられると、これに優る言葉を持つ日本人はなく、また、話のまとまりにおいても同様である。コスメ・デ・トーレス神父が山口のキリシタンらに必要な説教を聴かせるため彼を求めているので、直ちにかの地へ戻るであろう。』

*1555年9月23日付け バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第Ⅰ巻180頁

ロレンソと共に3年間生活したデュアルテ・シルヴァ修道士の言葉。

『いとも親愛なる兄弟ペドゥロ・デ・アルカソヴァが1553年10月に出発した後、私はコスメ・デ・トーレス神父に伴って山口へ赴き、彼および日本人3名とともに滞在したが、彼らの内の一人はロレンソという名前で、日本語を甚だよく話し、デウスのことどもにいつそう向いており、従順、清貧および貞潔のもとに過ごしている。』

*1555年9月20日付け デュアルテ・ダ・シルヴァ修道士の書簡

『16・17世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第Ⅰ巻201頁

1553年（天文22）（ロレンソ27歳）

2月4日、豊後派遣組。ガーゴ神父とフェルナンデス修道士が豊後府内に行き教会を開くために山口を出発。アルカソーヴァが同行した。2月10日、豊後府内に帰還。

豊後府内に教会のための土地が寄進される

2月11日、大友義鎮を訪問した、ガーゴ神父とフェルナンデス修道士は、義鎮から自領内での宣教師保護と布教許可状を与えられた。それに伴って土地寄進状が与えられ、教会、宿舎、菜園および望むものすべてを作ることのできる地所が与えられた。

豊後府内の“慈悲の聖母の住院”と教理学校

7月21日、大友義鎮から、教会に最もよい土地が寄進され、建物の建設にはクリシタンたちが熱心に奉仕した。この土地に教会と修院が造られると、7月21日に落成式をした。教会の名前は“慈悲の聖母の教会・Nossa Senhora de piedade”と命名された。教会のシンボルとして大きな十字架一基が建てられた。地所内にはキリスト教徒たちを埋葬する墓地が定められた。

ガーゴ神父の指導のもと、フェルナンデス修道士が中心となって、子供たちに、キリスト教の教理を教える『教理学校』が設けられた。この学校の使命は、異教徒にキリスト教とは何かを教えて教会に来させること、教理を深く学んだ者たちに洗礼の準備をさせることと洗礼を受けること、洗礼を受けたクリシタンたちのキリスト教の真理の知識を深めさせ、クリシタンとしての確固たる生活を行わせることを目的とした教育であった。イルマン・フェルナンデスが教育を担当していた。

『我が主はこんなに多くの少年の中から、日本の異邦人にその聖なる教えを述べ伝えるために数人をおえらびになるだろうという大きな希望があります』

*ジョアン・フェルナンデスの書簡

Juan Fernandez, 府内、1561年10月8日 M.H. 148, “Documentos”, p.410

またこの学校では、地球儀、図、数学器具、楽器、時計、眼鏡等を用いて、諸種の学問の講座も開かれ、天地創造および宇宙の組織等についての説明も行った。これらは日本人にとっては全く新しい説明であって、人々は驚きを持ってこれらの知識を吸収した。

山口に於いてのロレンソの修道生活

ザビエルはロレンソに自分の精神を伝え、洗礼を受け、キリストに対する自分の愛を与え、キリストに仕えるための熱心さをロレンソの心に蒔いた。ロレンソの心の目に祈りと神と一致するための道を教えた。その後、トーレス神父がロレンソの心に蒔かれた種を育て、修道生活の根本的なことを教え使徒職へと導いた。その時代の日本での使徒職の根本は、路上生活をするこゝで、孤独と真の清貧を味わい体験することだった。ロレンソはすでに琵琶法師時代の生活において、孤独と清貧を十分に味わう経験をしていた。右手には盲人の杖を巡礼者の杖に換え、

左手には大きな玉で作られたロザリオを持った。『ロレンソの声の音調は優しくありません』と記されている。その声は昔の武士物語りを吟唱するのではなく、グレゴリオ聖歌によって神を讃える歌に取って変わった。

ロレンソ・初めての豊後府内での布教生活（1553年春頃～秋頃）

『このころ、日本人イルマン・ロレンソはすでにこの家（山口の修道院）に住んでいた。春頃、ロレンソが父母をキリシタンにするために肥前の国へ行くことを願ったとき、トーレス神父はロレンソにそれを許したが、ロレンソは盲人であったので、道中施し物を乞い求めながら巡礼の旅をしていくことが条件であった。しかし、皆、異教徒の国であったから、喜捨に与かることは容易ではなかった。豊後に着くと、神父バルタザール・ガーゴは、ロレンソがコスメ・デ・トーレス神父のところから持ってきた書簡の内容を、平生説教を聴きに来る異教徒たちに説教させるために、ロレンソをそこに留めておいた。そのために、肥前へ行こうとするイルマン・ロレンソの旅は、その時は実現できなかった。しかし、ロレンソは2, 3年後（1557年）べつの機会に肥前に行き、彼の説教によって父母をキリシタンにした。』

*Luis Frois "Historia" vol.I, cap.13, p82

ロレンソ【27歳】はトーレス神父に、肥前白石にいる両親の改宗を願い出て許された。この時トーレス神父がロレンソに課した指導、すなわちロレンソをイエズス会の修練者のように試練を課した。路銀もなしに施しを受けながら巡礼するのは、聖イグナシオがイエズス会の修練者のために定めた試練で、イグナシオ自身の聖地イスラエルでの巡礼の経験の結果であった。その時代の日本での使徒職の根本は、路上生活をすることで、孤独と真の清貧を味わい体験することだった。ロレンソはすでに琵琶法師時代の生活において、孤独と清貧を十分に味わう経験をしていた。もうひとつは、この旅においてロレンソがどれほど精神的に熟しているかも判断できる。トーレス神父はロレンソのイエズス会入会を許可するに先立って豊後のガーゴ神父に協力を頼み、修行を兼ねて豊後府内のガーゴ神父のもとに送り、一層の修練を課したのかもしれない。ロレンソは心から両親の回心を望んでいたもので、豊後に留まり、バルタザール・ガーゴ神父の命令に従い、日々キリシタンたちの世話をしながら、説教を聴きに来る異教徒たちに説教をすることは喜びだったとしても、旅の本来の目的である肥前平戸にいる両親のもとに向かうことができないことは内心辛かったであろう。しかし、ロレンソは不平も言わずに従っていた。ロレンソが両親を改宗するという目的を果たせたのは、数年後、1557年、ヴィレラ神父と共に平戸で活躍した時であった。日本語がまだ自由に話さなかったガーゴ神父が、ロレンソが豊後府内に立ち寄ったときに、豊後府内の自分の信者を育てるために、成熟した伝道師へと成長しているロレンソを使いたかったことは、ロレンソを悩ませたに違いない。このことは、ロレンソがもう十分にひとりの伝道士として活躍できることを示している。知らせを受けたトーレス神父は、ロレンソを山口に呼び戻した。

11月頃

豊後府内から帰ったロレンソは山口でトーレス神父のもと布教に従事する。

シルヴァ修道士はロレンソが三誓願（服従・清貧・貞潔）を立てて修道士になったことを書いている。

『彼らの内の一人はロレンソという名前で、日本語を甚だよく話し、デウスのことどもにいつそう向いており、**従順、清貧および貞潔**のもとに過ごしている。』

*1555年9月20日付け デュアルテ・ダ・シルヴァ修道士の書簡

『16・17世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 201頁

山口にて布教に従事する。

1554年（天文23）（ロレンソ28歳）

教理の学び、説教の方法、仏教とキリスト教の比較宗論の方法、グレゴリオ聖歌（教会音楽）等、修道士の学びに修練するかたわら、実際に伝道に携わり説教をしたり、教理を教えたりした。この年1554年の何月頃（おそらく秋頃）からか不明だが、イルマン・デュアルテ・デ・シルヴァの手紙によると、山口の街から一里ほど離れた郊外の宮野村で人々の回心があつた。読み書きもできない貧しい農民の村で、数人の回心したキリシタンが中心となって熱心に集会を開き、特別な集会所を設けてそこに集い互いに励ましあつてた。

山口近郊の宮野村での布教活動

1554年の冬から1555年の初めころにかけて

『或る冬に、山口の市から一里の（宮野・Alienom）と称する町において、50名、もしくは60名がキリシタンになった。彼らは皆、農夫で、読み書きを知らないが、デウスのことで甚だ熱心なので、非常な学識ある人も彼らの話を聞くときには口をはさめないほどである。その町の仏僧は彼らを妨害したが、彼らと口論して負けると、直ちに同所を去り、彼らは自由になった。また、しばしば一定の場所に集まって互いに論じあい、デウスへの奉仕に尽力している。同地のもっとも寒い時期に、**司祭（トーレス神父）はこの町にロレンソを説教のために遣わした**。同所では大いに熱意が高まり、彼（ロレンソ）はキリシタンになるべき12名を同伴し、彼らは寒さに妨げられながら（山口へ）来た。その内の数人は歯もない老女であつたが、いとも迅速にパーテル・ノステルを覚え、あたかも生涯を通して学んだかのようにあつた。こうして（宮野）の人たちの中で、パーテル・ノステルを知らぬキリシタンはなく、それを発音することは我らにも劣らない。数日前、同地から一人のキリシタンが訪れ、（キリシタンの数が）300名に増えたと述べ、彼らの熱意やその進歩したさまについて語つた。』

*1555年9月20日付け 山口発 デュアルテ・ダ・シルヴァ修道士書簡

『16・17世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 203頁

【推論】

ロレンソがトーレス神父によってひとり宮野村に説教のために遣わされた。ロレンソの教える能力と才能には天が授けた素晴らしいものがあり、また天性の語学能力もあることが判る。ロレンソのラテン語の発音と、ロレンソからその『主の祈り』をラテン語で教えられた無学の農民でさえ、ポルトガル人も驚くほどの正確な発音で『主の祈り』を唱えていた。ラテン語に精通しているシルヴァ修道士も、これには大いに驚いたので、この話を取り立ててここに記録している。この記録から読み取れることは、人が物を覚えようとする場合、ただ繰り返して暗記するのではなく、それに音楽や旋律を付けたり、また伴奏で補助することにより、より一層正確に正しく発音することができることは音楽の力によるものと考えられる。グレゴリオ聖歌の『主の祈り・パーテル・ノステル、Pater Noster』をロレンソは教えた。おそらく、ロレンソは自分の琵琶で即興的に伴奏を付け、グレゴリオ聖歌の『主の祈り』の旋律を人々に歌わせて覚えさせたと思われる。教える時に正確なラテン語の発音とラテン語の持つ韻に注意を払いながら、グレゴリオ聖歌の持つ抑揚に乗せて歌わせた。現在でもこの教授法は音楽のみならず、文字を知らない幼い子供たちに対する非常に有効な教え方であり、確実に成果の上がる教授手法である。ロレンソは修道士として訓練を受け始めた時から、グレゴリオ聖歌の旋律に対して自分独自に琵琶で伴奏をつけて歌っていたと考えられる。ロレンソがザビエルから洗礼を受けて、修道士として学びを始めて以来、すでに3年が経過している。この時期にはロレンソの頭の中にはグレゴリオ聖歌の旋律に対して琵琶での伴奏の形態は完全に完成していたと思われる。宮野村の回心のイエズス会記録では『主の祈り』だけが記録されているが、当然にロレンソは『主の祈り・パーテル・ノステル Pater Noster』だけでなく『天使祝祷・アヴェ・マリア Ave Maria』『信仰宣言・クレド Credo』『めでたし天の元后・サルヴェ・レジナ Salve Regina』等、グレゴリオ聖歌で歌う様に教えていた。

下記の記録は、次の年 1555 年の豊後府内での布教の記録だが、ロレンソもこの記録と同じように、宮野村の農民たちに教理とグレゴリオ聖歌を教えていたと考えられる。

『当修道院に居住する日本人の同宿たちは、昼間は来訪者たちに「日本語とその文字で書かれた本」によってドチリナ（教理）を教え、夜、アヴェ・マリアの時刻に、つづいて、パードレ（神父たち）と共に、我ら一同はパーテル・ノステル、アヴェ・マリア、クレド（使徒信教）サルヴェ・レジナの祈禱（オラシヨ）を行い、また、航海者、特に日本に来る司祭と修道士のため、パーテル・ノステルを一度唱えたのち、ラダイニャス（聖母連禱）をとともに唱えていた。』

*1555年9月20日付け 豊後（大分）発 デュアルテ・ダ・シルヴァ修道士書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 214頁

1555年（弘治元）（ロレンソ 29歳）

5月頃・鄭舜功の豊後來航

勘合（日明）貿易は、大内氏が独占していたが、大内義隆が 1551年8月に、大寧寺に於いて

自害したため、1547年（天文16）の勘合船が最後となって以後、明との国交は断絶していた。当時、明では私貿易船が増加した。鎖国政策を取っていた明では、私貿易の根拠地雙興を官検が弾圧した。1552年（天文21）4月、漳州・泉州の海賊が船千余隻に乗って、倭奴万余人を率い、浙江の舟山・象山等に上陸して、台州・温州等を攻撃して、無数の住民を殺害して捕虜にする事件が起こった。以後、明では大倭寇時代に入った。

1555年浙江総督楊宣は倭情探査のために、鄭舜功を日本に派遣した。彼は4月に広州を出発し琉球を経て豊後に到着した。一行は佐賀関を回って府内の沖の浜に上陸した。大友義鎮に謁見した鄭舜功は、倭寇の禁圧を願った。義鎮は、鄭舜功一行を国賓の待遇でもって扱い、臼杵の海蔵寺の塔頭・龍宝庵を宿舎として提供した。【日本一鑑】

鄭舜功は滞在中に、府内から彼の従事官・沈孟網と胡福寧の二人を京都に送り、朝廷に倭寇の禁圧を要請させ話し合った。鄭舜功が豊後に来たもう一つの目的は、この海沿いの地での倭寇の根拠地に関する情報収集が目的だったと考えられる。

諸田賢順について書かれている『諸田系志』には、諸田賢順は豊後府内滞在中に明國の『鄭家定テイカテイ』について、「善鼓・琴」「五音六音の音階や、三・五・七・十三・二十五弦の琴」「伏羲・神農・黄帝の時代から伝わる古代中国の古事」更に「文武の宮廷上古の曲譜」等を学びその真髓を会得したと記している。この時期に古代より伝わる中国の琴の音律、漢詩（古詩）及び楽譜の書き方や箏の制作方法も教授され、賢順はそれらを学び習得したと考えられる。当時豊後府内には倭寇の取り締まりを要請するために明國使節代表『鄭舜功・テイシュンコウ』が1555年～1556年に掛けて来航滞在していたと記録にある。諸田賢順に中国の琴の音律、制作方法を伝授した『鄭家定』は『鄭舜功』の兄弟、あるいは身内かとも思われるが明細は不明。

鄭舜功一行は、豊後に2年間滞在して、ほぼ来日の目的を達成して、1556年（弘治2）の秋頃、明へ帰国の途に就いた。

義鎮は、鄭舜功の禁賊の要請を受け入れて、これを実行する意思を明廷に伝えるために、佐伯の龍護寺の僧・清授と、野津院の到明寺の僧・清超を、正使・副使に任命して同行させた。鄭舜功の一行が琉球を経て広州へ帰国してみると、浙江総督は楊宣と対立する胡宗憲に替わっていたから、鄭舜功は獄に繋がれてしまった。幕府の正式の貢使でない大友義鎮の使節を同行したことが、明の国禁に触れているのが理由とされた。鄭舜功は日本での見聞を『日本一鑑』としてまとめ、倭寇対策の資料として提出した。同行した二人の使節は、浙江省定海の七塔寺に抑留されていたが、1559年（永祿2）4月、四川省茂州の治平寺に流され、この地で没した。

山口に新しい教会堂が建築される

6月27日

『4日前、同師（コスメ・デ・トーレス神父）は我らに新たな修道院を建てたことを通信してきた。また、ロレンソの書簡によれば、陰暦6月27日まで、彼らは修道院の建設に従事して

いたが、修道院は長さ 8 プラサ半、幅は 6 プラサであるという。彼らは同 6 月 28 日、初めてその修道院でミサを行い、数日の間、新たな教会の建設に続いて説教をした。』

*1555 年 12 月付けの他のデュアルテ・ダ・シルヴァ修道士の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第 I 巻 207 頁

*プラサ=長さの単位、1 プラサは 167 c m

1551 年 9 月、陶晴賢の謀反により山口の領主・大内義隆が自害した時、山口の街は戦火のためにはぼ焼けてしまい、その時教会だった大道寺も延焼した。それ以来、4 年間、トーレス神父たちは、民家を借りて仮の聖堂としてミサを挙げていた。この年、キリシタンの献金と領主・大内義長の援助を受けて、教会建築が始まり 6 月 27 日、小さな教会堂は完成して落成式を執り行った。翌日 28 日、新しい教会堂で初めてのミサを執り行った。説教はロレンソがした。教会堂の大きさは長さ約 14、2m、幅 10m

トーレス神父は全面的に山口の教会の司牧に力を注いでいた。後にトーレス神父はこの時期の山口での牧会を振り返り『山口での生活は最も幸せな日々でした』と述べている。

豊後府内の修道院と布教の様子

『当修道院に居住する日本人の同宿たちは、昼間は来訪者たちに「日本語とその文字で書かれた本」によってドチリナ（教理）を教え、夜、アヴェ・マリアの時刻に、つづいて、パードレ（神父たち）と共に、我ら一同はパーテル・ノステル、アヴェ・マリア、クレド（使徒信教）サルヴェ・レジナの祈祷（オラシヨ）を行い、また、航海者、特に日本に来る司祭と修道士のため、パーテル・ノステルを一度唱えたのち、ラダイニャス（聖母連禱）をともに唱えていた。』

*1555 年 9 月 20 日付け 豊後（大分）発 デュアルテ・ダ・シルヴァ修道士書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第 I 巻 214 頁

『かつまた教会の国と当地方の発展のため、パーテル・ノステルとアヴェ・マリアを三度唱える』『我らが死者とともに修道院を出る前に、私は留まって少し祈り、三度パーテル・ノステルを称えると、キリシタンも唱和し、墓所においても死者を葬る前に同じことをなす。』

*1555 年 9 月 23 日付け 豊後（大分）発 バルタザール・ガーゴ神父書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第 I 巻 182～183 頁

9 月 20 日、アルメイダ、日本【平戸】に到着後、豊後に向かう

デュルテ・ダ・ガーマの船に乗って、ポルトガル人の医者で商人のルイス・デ・アルメイダ (Luis de Almeida・1525～1583) が平戸に着いた。アルメイダは修道士になって神に仕えるため、布教地として日本を選んだ。アルメイダは、治安の悪い所を 3, 4 日掛かってガーゴ神父のいる豊後府内に到着している。アルメイダが豊後府内に着いたことを知らされたトーレス神父は、アルメイダがイエズス会に入会するにあたって、豊後教会に責任者であるガーゴ神父に対して、

アルメイダに厳しい心霊修行を課すように命じ、その後イエズス会に入会を許可している。

アルメイダ、豊後府内に孤児育児院をつくる、

晩秋の頃、イエズス会に入会后、アルメイダは豊後府内で行われていた嬰兒殺しの悪習を止めさせることであった。そのために孤児育児院の設立を、領主である大友義鎮に願い出ている。

『この国民の間に行われている悪事の中に、子供を育てる辛労、または貧困のため出産直後に赤子を殺す悪習がある。本年、ルイス・アルメイダというポルトガル人が府内に来て住院に引籠り、イエズス会士になるための試練を受けていたが、この話を聞いて心を動かし千クルサドを投げだし、育児施設をつくりたいと太守大友殿（大友義鎮・後の宗麟）に言上した。何人も嬰兒を殺してはならぬ、子育てができない場合はこの施設につれてくるように命令書を出してくれと請願した。大友殿は快く賛同した。この施設には貧しいキリシタンの乳母および二頭の牝牛、その他必要な設備をととのえ、孤児たちが栄養失調で死亡しないように配慮した。』

* ガーゴの書簡

豊後府内で活動を始めたアルメイダが、まず手掛けたのは幼児（孤児）の収容施設だった。孤児育児院の運営はミゼリコルジア【慈悲の組】の組織で行われた。この孤児育児院はイエズス会が日本で初めて設けた社会福祉施設である。しかし、昼夜兼行で奉仕作業に従事したミゼリコルジアの男性組員たちの苦勞もつのも、折からの冬の寒さも加わり、嬰兒に下痢の症状が続発してアルメイダを悩ましたようだ。約1年後に、この孤児育児院は廃止され、それに代わって病院が創設された。

『デュルテ・ダ・ガーマの船に乗って日本に向かったポルトガルの青年は、4, 5千クルサドの財貨を所有し、ラテン語にも相当通じているが、イエズス会の創造主に動かされて日本に留まり、自費を投じて病院を建設し、まずしき病人を収容し、大いなる慈愛を持ってこれを治療している。』

* 1556年1月7日付け マラッカ発、ルイス・フロイスの書簡

『本年【1555年】当地（豊後府内）に留まることになったルイス・デ・アルメイダは、豊後の“慈悲の聖母の住院” “Nossa Senhora da Piedade のため貧者たちの病院を寄付した。』

* ガーゴ書簡

豊後府内に定住したアルメイダは、先ず幼児孤児の収容施設をつくり、その施設の運営に困難を感じながらも全力を尽くしたが全てにおいて無理があり廃止を決断した。その後社会不安の中で見捨てられた多くの病人たちの面倒を見ながら病院の必要性を痛感して、病院設立の準備に没頭した。

12月、山口での内乱・毛利元就対陶晴賢の戦い

毛利元就が陶晴賢に反旗を翻して、大内義隆の仇討と称して勅命を仰ぎ、毛利軍を率いて9月30日、嵐の中、厳島を攻め陶晴賢軍を打ち破った。陶晴賢は大内義長に代わって戦ったが敗れて自害した。さらに1556年3月、山口の街に内藤・杉の内乱が勃発して混乱を極めたために、毛利軍が山口に攻め入り、4月、山口の新教会堂が戦火のために焼け落ちた。大内義長は、これを防ぎようがなく、義長は高嶺城を棄てて豊浦に退却して勝山城に籠って、兄である豊後の大友義鎮【後の宗麟】に援軍を乞うた。しかし兄義鎮は、敢えて援軍を送らなかったため、義長は運尽き、翌年1557年4月3日、長門国豊浦郡長府の長福院（現下関市長府・功山寺）に於いて自害した。

1556年（弘治2）（ロレンソ 30歳）

1月、ロレンソ、バルナバと共に比叡山に上る。

山口の街がまだ荒廃の中にある最中、少しずつ教会活動は再開を始めた。荒廃した山口の街で、教会の活動は新しい展開に入りつつあった。幸いなことに、大和の国の多武峰という有名な寺からの二人の僧侶、キョウゼンとセンヨウの回心は、都での宣教の可能性を試す機会を与えた。仏教の教義について学識のあるキョウゼンはパウロと呼ばれ、センヨウはバルナバという名を受けた。パウロ・キョウゼンはまた医学の知識があり、五畿内ではよく知られた医者でもあった。トーレス神父はパウロ・キョウゼンと相談して、バルナバとロレンソを共に都に遣わすことに決めた。ザビエルの夢、すなわち『都でキリストの教えを述べ伝え、そこに都の聖母に捧げられた教会を建てること』の実現に向けて動き出した。

パウロ・キョウゼンは数人の知人宛ての紹介状を書いた。一通はすでに83歳のもっとも尊敬されていた僧侶心海宛で、もう一通は彼の弟子の70歳の大泉坊宛であった。

ロレンソとバルナバは、最初に大泉坊のところに行った。彼は病気だったが、パウロ・キョウゼンの手紙を丁重に扱い、彼ら面会はしたものの、彼らの頼みを聞くと返事はせずに、自分の師・心海のもとに送った。

『イルマン・ロレンソは貧しくみすぼらしい姿をしてやってきたので、威厳と体面とに包まれている心海と面談するには少なからぬ困難があった。しかし、イルマンは能弁であり、このような仕事にかけては老練であったので、ついに心海のところに行くことに成功し、直ちにデウスのことについて極めて巧妙に準備された話をし、少なからぬ熱意を持って語り、そのために自分が遣わされた仕事を首尾よくなしとげた。』

*Luis Frois "Historia" vol.I, cap.13, p85

ロレンソはこの時30歳、洗礼を受けてから5年が経っていた。83歳の心海は親切にロレンソの話の聞いたが、自分の年齢や耳が良く聞こえないという理由で、大泉坊のところへひき返すように勧めた。ロレンソはもう一度大泉坊に受け入れてもらったが、結局大泉坊は、もし比

叡山の最高位僧の知人のところに、山口の大名の紹介状を持ってきたならばすべての門が開かれるであろう、といて談話を打ち切った。比叡山に於いて交渉に万策尽きたロレンソとバルナバは山口に戻ることにして比叡山を後にした。

4月、山口の新教会堂、戦火のために焼失する

1555年6月27日に山口の小さな新教会堂は完成して落成式を執り行った。翌日28日、新しい教会堂で初めてのミサを執り行った。説教はロレンソがした。

半年後の1556年4月、山口の新しい教会堂は、毛利の戦火のために焼け落ちた。

山口のキリシタンたちは、戦火のために教会堂も失ったトーレス神父と修道士たちに安全な豊後に避難するように進言したが、トーレス神父は『私はあなたたちと共に死ぬ覚悟だ。あなたたちの危険を見捨てて豊後に避難するには忍びない。自分の身は老いて残る年月も少なく、もし死んだとしても恨みにも思わない。』と言って山口に残った。しかし、市中の混乱は激しくなり、脱出する機会を失いトーレス神父たちは恐怖にさらされた。山口は戦乱が相次いで起こったうえに、さらに累年の不作が災いして稀にない飢饉に襲われた。その最中、キリシタン信徒たちは教会を中心として、トーレス神父の指図によって、難民救済のために献身的に働き、付近から、米、および穀類を集めてきて被災民に分配をし、炊き出し等をして救済した。当時の社会情勢から見れば、キリシタンの救済活動は誠に大きな活動だった。

イエズス会本部、山口より豊後府内に移る

4月、トーレス神父一行、豊後府内に教会本部を移す

ロレンソとバルナバを比叡山に送り出した後、山口の街に内藤・杉の内乱が勃発して混乱を極めたために、毛利軍が山口に攻め入るが、大内義長には毛利軍の侵入を防ぎようがなく、義長は高嶺城を棄てて豊浦に退却して勝山城に籠って、兄である豊後の大友義鎮【後の宗麟】に援軍を乞うた。しかし兄義鎮は敢えて援軍を送らなかったため、義長は運んできた翌年1557年4月3日、長門国豊浦郡長府の長福院（現下関市長府・功山寺）に於いて自害した。この戦乱がようやく落ち着いた頃、トーレス神父は豊後府内への避難を勧めていた山口の信徒たちの願いを聞き入れて、教会の機能のすべてを豊後府内に移した。その後大内氏の後を継いで山口の領主になった毛利元就は、キリシタンに対して全く好意を持たなかったため、再興4年にして、山口のキリシタンたちは、羊飼いのいない羊の群れとなってしまった。山口の信徒の中には、信仰を守るためにキリシタンの盛んな豊後や筑前地方に移り住む人たちも多かった。山口の教会の柱として活躍した、コンスタンチノ渡辺太郎左衛門一家も山口を離れた。大内氏の重臣安藤某も、山口で信仰に導いてくれたガーゴ神父が博多にいると聞いて、密かにガーゴ神父のもとに行き、厳格な修道をしたり、祈祷会を開いたり説教の手伝いをした。このことが毛利元就に知られ、許可なく領地を出奔した罪により死を命じられたが、最後まで所信を変えず、揺るぎのない信仰は残った山口の信徒たちの希望の光となった。この後17年間、山口の教会は、司祭不在の無牧の状態が続くことになり、毛利元就の圧政下、残されたキリシタンたちは、ザビ

エルから洗礼を受けた二人の長老を中心に約 300 名の信徒が、司祭なしのミサを挙げ、秘跡を続け、自主的にキリシタン相互扶助組織・コンフラリアを作って互いに励ましあいながら信仰を維持していくことになっていく。次に山口に宣教師が来るのは 17 年後の 1573 年（天正元）新たに日本管区長に就任したカブラル神父が、長崎から博多を経て山口に 3 カ月滞在した時であった。

ロレンソとバルナバ、比叡山から山口へ戻り、豊後に向かう

ロレンソとバルナバが、比叡山での交渉に失敗して山口へ戻ったが、二人が目にしたのは廃墟と化した山口の街だった。山口のキリシタンたちから、戦火のために山口の教会堂も焼け落ち、トーレス神父たちが豊後府内に移り住んだことを聞かされた二人は、トーレス神父たちの後を追って、豊後府内に向かった。ロレンソとバルナバの帰還は、府内に移り住んでいた宣教師たちから大きな喜びで迎えられた。トーレス神父は比叡山の太田坊の最後の返事を聞くと、ロレンソに山口にひき返して、太田坊から要求された大内義長の紹介状をもらってくるようにいった。ロレンソは比叡山への長旅で疲れていたが、再度山口に大内義長を訪ねて紹介状を書いてもらい、それを携えて豊後に戻った。ロレンソが大内義長を訪ねた時、大内義長は高嶺城を棄てて豊浦に退却して勝山城に籠って、兄である豊後の大友義鎮【後の宗麟】に援軍を乞うていた。しかし兄義鎮は、敢えて援軍を送らなかったため、義長は運尽き翌年 1557 年 4 月 3 日、長門国豊浦郡長府の長福院（現下関市長府・功山寺）に於いて自害した。不幸な大内家最後の大名・大内義長が紹介状を快く書いてくれたことは、宣教師たちに対する最後の保護であった。トーレス神父は、その紹介状を、次の機会に比叡山に行くことがあれば使おうと大切に保管した。

ロレンソ、2 回目の豊後府内滞在（1556 年 5 月～1557 年 8 月まで）

1556 年 5 月～

豊後府内の教会は、領主・大友義鎮の保護もあって 1554 年から 1556 年までにガゴ神父とイルマン・フェルナンデスの働きによって大きく進展していて、周辺の町と村の信者の数は千人を超えていた。

トーレス神父は山口から避難して府内に到着した時には重い病に罹っていた。山口での 5 年の活動の實りを毛利元就によって潰されるのを見るのは辛かった。府内でしばらく静養を取った後、新しい府内の地でトーレス神父は教会活動と新しい宣教師の育成を続けた。

ロレンソ、パウロ・キョウゼン、アルメイダ、イエズス会に入会する

ザビエルが最初のキリシタンに洗礼を授けたが、トーレス神父は初めて日本人をイエズス会に引き受ける人となった。府内に於いてトーレス神父は 3 人をイエズス会に迎えた。盲目の琵琶法師だったロレンソ、大和の国の多武峰という有名な寺の僧侶で医者の子のキョウゼンとポルトガル人のルイス・デ・アルメイダの 3 人。トーレス神父は管区長ではなかったため、教会法ではイエズス会に入会を許可する権限を持っていなかった。実際にはトーレス神父が彼らの入会を

許可し、2ヶ月後の7月に府内に到着したメルキオール・ヌニェス (Melchior Nunes) 管区長が、トーレス神父が許可したことを承認した。

ロレンソの名前は、名簿の一番初めにある。ロレンソのイエズス会入会の日は記録されていないが、比叡山への旅の前であった。パウロ・キョウゼンもまた山口における新しい改宗者である。大和の国 (奈良県) 多武峯の修行僧で仏教の教義についての豊かな学識を持ち、難行苦行をしたが満足が得られずに、京に出て漢方薬の学びを深めて五畿内では良く知られた高名な薬師だった。ルイス・フロイス神父はキョウゼンのことを『日本の (仏教) 宗派のなかでもっとも学識がありかつ第一級の医者であった』と紹介している。

アルメイダの入会については、トーレス神父自身が 1557 年の書簡の中で『ここ (府内) で私は『人の病を癒す力』を有する一イルマンの入会を受け入れました。』と確認している。

* Bourdon, “Uma carta inedita”, p.197,

5月上旬

大友義鎮の重臣、佐伯惟教 (これのり)、小原鑑元 (あきもと)、本庄新左衛門尉、中村新兵衛尉長直、賀来紀伊守らが、大友義鎮に対して謀反を企てた。

『豊後の王は、家臣達の中から謀反を起こすものが出るのではないかと疑っていた。我々一行 (ヌニェス神父たち) が府内に到着する 15 日前のこと、豊後王は謀反の嫌疑のかかっている重臣たちを攻め、13 人の重臣の家に火を放ち、彼らの一族とその家臣たちを滅ぼした。戦いは、田北鑑重 (あきしげ) 紹鉄 (じょうてつ) の率いる田北一族の討伐軍が、本庄新左衛門の館を攻撃することから始まった。討伐軍と反乱軍の闘いは激しく、一夜で七千人の死者が出るほどであった。反乱は一応鎮圧されたが、新たな蜂起のおこる恐れがあり、豊後王は府内を退去して、三方が海に囲まれた自然の岩の上に建つ新しい城 (臼杵丹生島) に移った。豊後国内は不穏な状態が続いており、神父たちはキリシタンたちと協力して、夜間は住院を警備する必要があった。』

* イエズス会の記録より

諸田賢順の出仕【諸田系志による】

小原鑑元 (あきもと) は、1551 年 (天文 20) の戦いで、葛岳城 (つづらだけ) 城主、大津山河内守資冬 (すけふゆ) を攻め敗走させた。大友義鎮の父・義鑑は小原鑑元にその葛岳城を任せ、肥後と筑後の国境を抑える要の城として、重要な役目を担わせていた。

葛岳城は、熊本県玉名郡南関にあり、別名・大津山ともいい標高 256m の孤立した山で、その山の頂に城が築かれていた。この城は菊地氏の時代から、肥後と筑後の国境に位置して、両国の抑えの要として重要視されてきた。肥後国誌によれば、葛岳は大津山河内守資基により 1396 年 (応永 3) より代々大津山氏の居城であった。

大友義鎮は、英彦山で忍渋の生活をしていた諸田賢順 (箒の祖と言われている) を葛岳の陣中に呼び出し、葛岳城攻略のための工作を命じた。

大牟田の諸田家に伝わる伝承・故諸田素子氏による

【伝承】

『大津山城（葛岳城）の工作命令を受けた賢順は、この難攻不落の城を落とすにはどうすればよいかと考えた。賢順は単身、城内に乗り込むため琵琶法師の姿になり、山の南側の南関の村落を通り、琵琶を弾きながら城への山道を登って行った。

賢順は幼少のころ「布生穎悟、奇人」とうたわれていた。容姿風貌はたおやかではあるが一種独特の風格を持ち、ひとたび口を開くと人を引き付ける不思議な弁舌を持っていた。また賢順は箏や琵琶の名手でもあったので、城門の警備の武士たちも、賢順の奏でる琵琶の音に魅せられて、陣中見舞いの琵琶法師として城内に招き入れてくれた。城にあがっても警護の武士、女中や腰元、城主・小原の奥方たちにも不審の者とは思われずに歓迎された。

賢順は琵琶を弾き、詩を吟唱し、城内に有った箏を弾いて人々を慰めた。この時、賢順は城の東北の筑後側に面する鬱蒼と茂った樹木を切らせた。』

『南関記聞』には『この山城は搦め手にあたる北東部は急な崖であり、南西部の大手が攻撃路』と記されている。『西国盛衰記』に『高橋鑑種が 60 人でこの北東の急な崖から忍び込み、本城を乗り越え破り、一片の煙と燃えたつる…』と記録されている。

大内家を滅亡させた毛利元就は、大内家の所領であった北九州奪回のために大友方の城主である、豊前、筑前の国衆を味方に引き入れようと画策した。それ以前に大友家には、大友義鎮の父・義鑑時代の太友家臣団の同紋衆（一族、譜代）と他紋衆（外様衆）の間の派閥抗争が根底にあった。豊前、筑前の国衆の動揺に豊後国内の他紋衆が呼応して大友義鎮に反旗を翻した。

1556年（弘治2）5月、

小原鑑元は、豊後佐伯の佐伯惟教、本庄新左衛門尉、中村長直らと密約を結び挙兵した。他紋衆の本庄新左衛門尉、中村長直、賀来は府内の町を襲ったが、同紋衆の志賀、戸次、吉弘、田北により打たれ鎮圧された。イエズス会の報告には『双方7千人が一夜にして死亡した』とある。豊後の首都・府内で起こった叛乱は大友義鎮と豊後国内の全ての武将を震撼させた。義鎮はすぐに反乱軍の首謀者である小原鑑元の討伐を命じた。この時、肥前にいた元葛岳城主・大津山資冬が大友に帰参を許され、葛岳城攻略の案内を務めた。賢順はこの大津山資冬の軍に組込まれた三池軍に入り攻略に参加したようだ。（賢順の郷里、宮部郷は三池の領地に属していた）豊後の田原親賢、肥後の武将、木野、小代、筑後の谷川、河崎、辺春、三池、田尻、蒲池等の武将が3千余騎を持って葛岳城を包囲した。『肥後国史』

5月6日から始まった葛岳城攻撃は、7日も終日行われ、攻撃は町小路を焼き払いながら登山路へと取り掛かった。8日、総攻撃が開始され激しい攻防戦が展開された。木野親政も重傷を負い戦死した。元城主、大津山資冬は城への通路に精通していたから、北東部の急崖を精鋭の兵と共によじ登り城内に入った。武功の勇将である小原鑑元・43歳はよく奮戦したが、城に火

を掛けられたために、36歳の妻と17歳の娘を刺殺した後、120名を率いて門外に出て討ち死にした。大友軍も192人が戦死している。高橋鑑種はこの時の武勲を認められ、後に筑前・宝満城の城主に抜擢されている。

賢順、出仕する

賢順は、この時の工作の恩賞として、大友義鎮から豊後府内に来て出仕（自分に仕える様に招くこと）するように言われ、英彦山にいた家族や親戚たちを連れて府内に移り住んだ。

【推論】

大友義鎮に出仕するように言われた時、大友義鎮は賢順に、昨年（1555年）5月頃・明国から鄭舜功が豊後府内に来航して、大友義鎮に謁見して倭寇の禁圧を願っていること。義鎮は、鄭舜功一行を国賓の待遇でもって扱い、臼杵の海蔵寺の塔頭・龍宝庵を宿舎として提供していること。明国の使節の中に『鄭家定・テイカテイ』（『鄭家定』は『鄭舜功』の兄弟、あるいは身内かとも思われる）という素晴らしい楽士がいて、明国の「善鼓・琴」「五音六音の音階や、三・五・七・十三・二十五弦の琴」「伏羲・神農・黄帝の時代から伝わる古代中国の古事」更に「文武の宮廷上古の曲譜」等の真髓を会得していること。また彼は、古代より伝わる中国の琴の音律、漢詩（古詩）及び楽譜の書き方や箏の制作方法も伝授できること。鄭舜功一行は、ほぼ来日の目的を達成して、今年の（1556年・弘治2）秋頃にも明へ帰国する予定であること等の情報を、賢順に伝えたと考えられる。

豊後府内に移り住んだ賢順は、大友義鎮の推薦状を携えて臼杵の海蔵寺の塔頭・龍宝庵を宿舎としている鄭家定を訪ねて、早速に教えを乞うたと思われる。

明国の『鄭家定テイカテイ』について、「善鼓・琴」「五音六音の音階や、三・五・七・十三・二十五弦の琴」「伏羲・神農・黄帝の時代から伝わる古代中国の古事」更に「文武の宮廷上古の曲譜」等を学びその真髓を会得したと『諸田系志』は記している。この時に古代より伝わる中国の琴の音律、漢詩（古詩）及び楽譜の書き方や箏の制作方法も教授され、賢順はそれらを学び習得した。

鄭家定は自分の骨髄を会得し得る人を、かつて日本で会ったことがなかった。府内で教えた賢順はその妙手であり「通鬼神感」と賢順のことを賞賛している。賢順の弾く箏の音と、箏に合わせて朗々と歌うその声は「梅花然其調聲流存」と言った。

鄭家定は、鄭舜功使節と共に半年後の1556年秋に明国へ帰国している。

7月初旬、日本とインドのイエズス会管区長・メルキオール・ヌニェス府内に到着する

1556年7月初旬、フランシスコ・マスカレーニャスの船が府内に入港して、管区長メルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）とガスパール・ヴィレラ（Gaspar Vilela）神父、および二人のイルマン、ギリエルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が到着した。この中の5人はゴアのコレジオの学生たちだった。彼らはポルトガルからきた孤児で、ゴアの修道院で教育を受け、言葉を覚えるにはもっともすぐれた素質と音楽の才能を持

ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』に、もっとも習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。

『聖イグナシオは、特に典礼音楽の使用を必要としていた使徒的型の状況が存在すると即座に理解した。常に虚心な彼自身ローマで荘厳な晩課を導入し、それを諸布教地に対して認可した。彼は 1553 年、ゴアにおける晩課の歌唱を「承認し」「宗教に未知な彼の人々が、その方法によって一層強くデウスの礼拝へ誘うため 3 年後にインドで聖務日課を容認したのである。教会音楽が初期イエズス会士のもっとも独自の活動の中でも重要な位置を占めていることを忘れてはならない。音楽はアジアの新布教地で計画的な目標を漸次達成していった。子の布教地の創始者・聖フランシスコ・ザビエルは自己の使徒的手段に音楽を使用している。クリミナル神父は 1545 年 10 月 7 日付け書簡の中で「祝日にミサを歌う」一少年グループ・既に 20 歳に達している者もおれば 7 歳を超えないものもいると聖イグナシオに報告している。かれらはこのような祝日の際にも聖務日課を常に歌っている。バルセオ神父はこれら少年に言及して、彼らの中には「ポルトガル人、カスティソ（ヨーロッパ人の父親とユーラシア人の母親との間に生まれた混血児）ミスティソ（混血児）が数えられ、「その大半はカント・リャノ *canto llano* =グレゴリオ聖歌とオルガン伴奏歌唱 (*figurado*・グレゴリオ聖歌で歌詞に一音節二つ以上の高さの異なる音符をつける) の一部を歌うことができる」と詳述している。その後、イルマン・ペドロ・デ・アルメイダが聖歌隊を担当し、彼らは祝日、聖母マリアの祝日、および火曜日には「常にオルガン伴奏合唱でミサを歌い」、主日には晩課の歌唱を加え、胸に赤い十字を付けた白衣を着、街頭で教義も歌っている。』

『我々はポルトガルから来た孤児の中から 5 名の少年を伴っている。彼らは言葉を覚えるのにもっとも素質の優れた者、およびわれわれの信仰問題を象徴する主要な祝日のカント・リャノ（グレゴリオ聖歌）とオルガン伴奏歌唱に、もっとも習熟した者である。我々が聖務日課を極めて荘厳に行うのは、人々がこのような外面的行事によって深く感動するからである。』

後にギリエルメ・ペレイラ (*Guilherme Pereira*) はイエズス会に入会してイルマンになり、日本に永住した。布教地の典礼音楽に与えた影響は大きい。この派遣団が、ある種の経済的余裕によって準備され得たので、新布教地のために入手した書籍の中には、典礼のための本が何冊かあった。教会の発展のために有効な『グレゴリオ聖歌・*canto chao* 一冊、オルガン伴奏歌唱一冊である。これらは日本にもたらされた最初の典礼音楽書である。

音楽書は漸次増加してゆくことになるが、しかしフロイス神父は 1587 年になっても依然、音楽書の中で「日本で極めて不足している」典礼歌集を列挙している。

1614 年キリスト教追放令によりマカオに持ち出された日本で使用された音楽関連書が、1616 年と 1632 年に図書目録として残されている。

『音符を附した 3 つの受難書』 *Tria Passiona cum notis musicis*

『合唱堤要』 1 冊、 *um Manual de Coro*

『大音楽書』3冊、Tres libros de Solfa grandes

『ローマ交誦聖歌集』1冊、um Antiphonario Romano

『ドゥアルテ・ロボのミサ書』1冊、um Libro de Missas de Duarte Lobo

*ロペス・ガイ (Lopez Gay)

『キリシタン音楽・日本洋楽史序説』キリシタン研究第16輯 3～55頁掲載・吉川弘文館

府内で始まる音楽訓練

ギリエルメ・ペレイラ (Guilherme Pereira)、ルイ・ペレイラ (Rui Pereira) が府内に到着した。この中の5人はゴアのコレジオの学生たちだった。彼らはポルトガルからきた孤児で、ゴアの修道院で教育を受け、言葉を覚えるにはもっともすぐれた素質と音楽の才能を持ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』に、もっとも習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。ギリエルメ・ペレイラ (Guilherme Pereira)、ルイ・ペレイラ (Rui Pereira) が中心となり、早速、府内の子供たちに音楽の訓練が始まった。この成果は、同年のクリスマスと翌年1557年の4月、受難週とそれに続く復活祭で、二つの聖歌隊が組織され、歌ミサが挙げられた。

7月に府内に到着したメルキオール・ヌニェス管区長は、トーレス神父がイエズス会に入会を許可した3人を承認した。

府内に到着したメルキオール・ヌニェスのトーレス神父の印象は『善良な老コスメ・デ・トーレスは私たちに会って話しながら涙を止めることができなかった。彼はあらゆる徳や自己制御に於いて完全な人物である。彼はマエストロ・フランシスコと共に日本へ行ったが、神父がインドに帰る時に彼を山口に残した。七年の長い間、山口にいたがその間まったくいかなる肉をも口にしなかった。それは日本人が肉を食べることは大きな罪悪であると考え、特に山口のように人びとが高い教養を有する場合にこの風習が強いからであった。人びとに高い感情を抱かせないために肉を食べず、また苦行を大切にするために、当地にはないパンや新鮮な魚を食べず、ただ日本風に炊いた米、それは余程必要にせまられなければ食べられないものであるが、それ塩にした魚と野菜のほかは何も食べなかった。そして肉を食べると体に害になるほどこの風習になじんでしまった。』『トーレスは一生のうちで山口のあの六、七年ほど喜びと慰めに恵まれた生活はなかった、と私に語った。わたしは、彼が慰めの涙の結果として、大部分視力を失っていたと思う。あらゆる徳において試練を経た神父は一方ではこれらの慰めを抱き、一方では悩みを抱いていた。私としては彼をエジプトのあの聖人たちに比べてみた。後者は神を眺め、神との優しい会話のうちに生きていたが、コスメ・デ・トーレス神父は一人のイルマンが一緒にいるのみで、当然考えうる厳しい寒さと飢えに苦しみながら、彼を迫害する敵の中にいた、という違いがある。』*Cartas I, 49.

最初の挨拶の後、諸事情の報告を受けた後、人々の新しい配置を行った。府内にはトーレス神父の補佐としてヴィレラ神父が残った。ヴィレラ神父は書簡の中で『トーレス神父がすでに非常に老齢であるし助け手を要する。このように数多くの大きな仕事は常に助け手が必要である。またこれらのキリシタンに対して取っている方法や修練およびこの地の習慣を彼（トーレス神父）から学ぶことが必要であった。』*Cartas I, 54.

トーレス神父の働きは一人ではできないものではなかった。トーレス神父は助手のグループを作って共に働き寝食を共にして生活した。自ら修道者としての模範を示して彼らを指導した。ロレンソもトーレス神父と共にいて、府内教会の中の信心深い雰囲気の中に、トーレス神父の生活から、深い祈りの精神、使徒職への熱意を受け取っていた。

*Luis Frois “Historia”, Vol. I, cap.19, pp.123~126

当時府内にいたイエズス会士は9人であった。

トーレス (Cosme de Torres) 神父 (布教長)

ヴィレラ(Gaspar Vilela)神父、

フェルナンデス(Juan Fernandez),アルメイダ(Luis de Almeida)、シルヴァ(Duarte de Silva)

ギリエルメ・ペレイラ(Guilherme Pereira)、ルイ・ペレイラ(Rui Pereira)、

ロレンソ了齋、パウロ・キョウゼン、他、病院に勤務する日本人数名。

平戸の教会に派遣されたガーゴ(Baltasar Gago)神父

『府内に駐在していたガーゴ神父は、平戸に派遣された。平戸は、府内の北方にある島の首端の町で、日本最良の港である。ポルトガル船は、多くはこの港に入港する。平戸には若干のキリシタンがいて、港の領主(松浦隆信)は、表面上はわれわれの友人であるとの態度を示している。われわれは、彼から許可をもらって一区画の土地を購入し、聖母の会堂を建立した。この結果、同港にやってくるポルトガル人は、神(デウス)に祈るための会堂ができたし、同地のキリシタンたちは、神(デウス)を崇拜し、キリスト教の教えを説く教えを聞くことができるようになった。』

*ガスパル・ヴィレラ神父の書簡、1557年10月28日付け

ヌニェスが持参した図書が百冊あまりあった。ヌニェスは聖書の専門家であり学問のある人物だった。持参した本には、クリソストモス、チブリアーノ、アウグスティヌス等の聖教父たちの著書、聖トマス、聖ベルナルド、プラトン、アリストテレス、カルトウジオ会士ケンピス、聖フランシスコ・デ・ボルジャ等の神秘家の著書、新しい聖書注釈者のティテルマンズ、ガーニェ、ナバーロの著作、また典礼書やグレゴリオ聖歌(Hum livro de canto chao)と典礼のための楽譜、オルガンの歌集(Outro de canto d'orgao),その他の図書と数冊の聖書があった。今も残っているこの目録には、聖書と聖書に関する著書が、次のとおりにある。聖書3冊、そ

の中の一冊は大きい【豪華版】、新約聖書 6 冊、詩編 7 冊、詩編注釈書 1 冊、伝道書注釈書 1 冊、雅歌に関する注釈書 1 冊、パウロの書簡に関する注釈書 1 冊、聖書策引(Concordantia) 1 冊、これらは総べてラテン語かポルトガル語であったが、当時の宣教師たちが聖書研究に大きな関心を持っていたことを示している。

ロレンソ、教会で用いる教理の順序を整理する

『府内の教会で用いた教理の順序は根本的にロレンソが生涯にかけて使ったものである。』

* Cosme de Torres 府内発、1557 年 10 月 7 日付け、イエズス会総長イグナシオ・ロヨラ宛、M.H.,137, “Documentos”, p.737~738,

ロレンソ、『ドチリナ・キリシタン』の翻訳を手伝う

ヌニェスが府内滞在中に日本のキリシタンを念頭に置いて書いた『ドチリナ・キリシタン』がある。この『ドチリナ・キリシタン』の内容は、キリスト教の基本的な教義の根本を説いた書である。それまでの本はインドで普及していた物を、ザビエルが日本に来る時に日本に適合するように教理書を改訂したもので、さらにその版にヌニェスが手を加えたようだ。ザビエルの布教以来使われていたこの教理書を、さらに判りやすい日本語にするためにロレンソが手を加えたと考えられる。ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』の中で『これは (25 ヵ条のこと) 1570 年代にフランシスコ・カブラル神父が日本に行くまで使われていた。この時期になるとすでに日本人のイルマンたちがおり、またその国の人で諸宗派に精通した者もいたので、この神父は信仰の奥義について、いっそう詳しい公教要理をあらわし、同時に異教徒の諸宗派に反論を加えた。これが現在まで普通に使われているものである。』

*参考文献

フーベルト・チースリク著『キリシタンの心』第 1 章 キリシタン時代の教理書 9~61 頁

11 月 教会活動の再開

1556 年 7 月初旬に豊後府内に来たフランシスコ・マスカレーニャスの船は 3 ヶ月余り府内に停泊していた。管区長メルキオール・ヌニェス (Melchior Nunes) は自分が乗ってきた船に乗ってマカオに帰って行った。

トーレス神父の補佐を始めたヴィレラ神父は『11 月に私たちは説教やそのほかの仕事を続行し始めました』と報告している。

* Cartas I, 54v.

* 1557 年 10 月 29 日付け 平戸発、ガスパル・ヴィエラ神父の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 III 期第 I 巻 251 頁

アルメイダの病院のための土地の購入

『1556 年の秋 (11 月頃)、ヌニェス神父たちが豊後よりインドに帰帆してからは府内もよう

やく静穏になりました。（中略）そこで、私たちは大友殿から広き良き地所を購入しました。この土地の中には、もっとも良き杉材で造られた数軒の家もありました。』

*1557年11月7日付け、コスメ・デ・トーレス神父の書簡、

ロレンソの教会での役目

『もう一人の日本人、イルマン・ロレンソは我が主の御教えについては深い知識を持っています。ミサの後、洗礼の準備をしている数人に、また、受洗したばかりの他の人にも1時間ほど、または必要な時間を費やして話をします。または質問してくる信者の疑問にも答えます。』

*Gaspar Vilela 府内発、1557年10月29日付け、M.H.vol.137“Documentos” p.798

『当時、我らの同僚たちの司祭館では、キリシタンたちに信心を教え、彼らがデウスのことを喜ぶように導くために、一日の七度の聖務日課の時間に合わせて、七回、ちいさな鈴を鳴らす習わしであった。それを聞くと、司祭館にいる全員は聖堂に参集し、一人の少年が大声で主の御苦難の物語の一カ所を朗読する。そしておのおのは、その御受難を追想しながら、当地方のために「パーテル・ノステル」を五回、「アヴェ・マリア」を五回唱えて祈った。そしてこれは多年にわたってキリシタンの中に広まり、いろいろの地方で彼らは自分たちの家で同様のことを行った。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第6巻 大友宗麟編I 第17章(第I部19章) 173～174頁

コスメ・デ・トーレス神父が修道士たちと共に豊後府内の司祭館で行った修行について

【推論】

賢順、鄭家定について明の音楽を学ぶ（1556年5月下旬頃～11月）

賢順は明国使節の楽士であった『鄭家定テイカテイ』について、「善鼓・琴」「五音六音の音階や、三・五・七・十三・二十五弦の琴」「伏羲・神農・黄帝の時代から伝わる古代中国の古事」更に「文武の宮廷上古の曲譜」等を学びその真髓を会得したと『諸田系志』は記している。この時、古代より伝わる中国の琴の音律、漢詩（古詩）及び楽譜の書き方や箏の制作方法も教授され、賢順はそれらを学び習得した。

11月頃、明国の使節『鄭舜功』一行、明国に帰国する

賢順、ロレンソについてグレゴリオ聖歌を学ぶ（1556年12月～1557年8月頃）

その後、賢順は大友義鎮から、府内にいるキリシタンのイルマン（修道士）で、琵琶で伴奏をしながらグレゴリオ聖歌を歌う盲目の琵琶法師ロレンソのことを聞いた。明国の音楽を学んだ後、賢順にとって初めて聴く西洋音楽を求めて、賢順は府内にあるキリシタン住院を訪ねた。イルマン・ロレンソは訪ねてくるすべての人々の質問に答えていた。それがロレンソの教会で

の役目だった。『イルマン・ロレンソは我が主の御教えについては深い知識を持っています。ミサの後、洗礼の準備をしている数人に、また、受洗したばかりの他の人にも1時間ほど、または必要な時間を費やして話をします。または質問してくる信者の疑問にも答えます。』ロレンソの歌うグレゴリオ聖歌と琵琶の伴奏は、賢順にとっては初めて聴く音楽だった。ロレンソが弾くグレゴリオ聖歌の琵琶の伴奏は、ザビエルに出会って洗礼を受けて以来6年の間に確立され、すでにロレンソの中で組織体系化されていた。

『主の祈り・Pater noster』『アヴェ・マリア・Ave Maria』『めでたし天の元后・Ave Regina caelorum』『めでたし慈悲深き聖母・Salve Mater misericordiae』『麗しい救い主の聖母・Alma Redemptoria Mater』『クレド・Credo』『めでたし元后、憐れみ深き御母・Salve Regina Mater misericordiae』

いくら時間が掛かろうとも、ロレンソは賢順に一音一音を丁寧に教え続けた。おそらく、ロレンソがグレゴリオ聖歌の旋律を歌いながら琵琶を弾き、賢順自身も琵琶を弾きながら覚えていった。賢順は習った音を、数か月前に鄭家定から学んだばかりの明の記譜法を使って書き取り記譜していった。ロレンソと賢順の二人して向き合う真摯な音楽に対してのこの作業がいつ始まりいつ終わったのか、何ヶ月掛かったのだろうか、賢順はこの学びでキリシタンになったのだろうか、これらすべては歴史という時間の中に埋却してしまっただが、賢順によって残された楽譜が真実を語ってくれるであろう。

ロレンソの府内滞在中、賢順は幾度となく、ロレンソの許を訪ね、グレゴリオ聖歌と琵琶の伴奏を習ったと考えられる。

ロレンソが歌いながら琵琶で伴奏を付けた伴奏譜が、賢順によって記譜されて残され、整理編集されて、段物と呼ばれる6つの箏の独奏曲として徳川時代の厳しい禁教をかいくぐり、実に460年間を生きていた。

段物とグレゴリオ聖歌

- 5段 『ミサ通常文第1・聖母マリアの祝祭日・聖なるかな・Sanctus』
- 6段 『クレド・Credo』
- 7段 『麗しい救い主の聖母・Alma Redemptoria Mater』
- 8段 『ミサ通常文第1・聖母マリアの祝祭日・神の小羊・Agnus Dei』
- 9段 『ミサ通常文第1・聖母マリアの祝祭日・Gloria in excelsis Deo』
- 12段・乱れ 『主の祈り・Pater noster』

ロレンソと賢順が豊後府内において出会えた期間について

第1回 1556年5月～1557年8月

ロレンソがトーレス神父の命により山口から比叡山に遣わされ、交渉に失敗して山口に帰ったが、山口が戦火のために、トーレス神父たちは豊後府内に避難し、それに伴いすべての教会の施設を移転させたために、ロレンソも府内に移ってきた。

この頃、賢順も大友義鎮の出仕命令により、葛岳城の戦いに参戦、工作をしたようだ。その後、戦いでの功績により大友義鎮に召し抱えられ、一族を連れて、英彦山より府内に移住した。当時、臼杵に来航し、臼杵の海蔵寺に滞在していた明の使節・鄭舜功の使節の楽士、鄭家定を大友義鎮より紹介された。賢順は早速臼杵に行き、鄭家定に師事、明の音楽、箏の音律、箏の製作法等を明の使節が帰国する11月までに修得した。この期間は5月終頃～11月の5ヵ月間と考えられる。

臼杵より府内に帰った賢順は、大友義鎮より、ロレンソという盲目の琵琶法師が、教会にいてグレゴリオ聖歌を歌いながら琵琶で伴奏を付けて歌っていることを知らされ、西洋の音楽を知るために学びに行った。ロレンソが歌うグレゴリオ聖歌は、賢順にとって、初めて聴く西洋の音楽だった。新しい音楽の全てを学ぶために、ロレンソは琵琶で伴奏を付けながら歌うグレゴリオ聖歌を、賢順も一音一音、忠実に学び、鄭家定より学んだばかりの、明の記譜法を用いて記譜していった。この期間は1556年12月頃から～1557年8月頃の9ヵ月と考えられる。

第2回 1558年5月～1559年9月2日

ロレンソが平戸で布教した時、ヴィレラ神父がキリスト教に改宗した人々の持っていた仏像や経典を俵に詰めて海岸に運び、うず高く積んで焚火とした。ヴィレラ神父の熱烈な伝道方法は、仏教徒たちとの間に衝突を引き起こし、そのために自分たちの命が危険に曝されることになった。領主・松浦隆信はヴィレラ神父に立ち退きを迫り、ヴィレラ神父はロレンソと共に博多を経由して豊後に帰った。ロレンソは、府内の教会で説教をしたり教理を教えたりした。また新しく日本に着いた宣教師に日本語を教えた。ガーゴ神父の著した25ヵ条のカテキズモ・教理書の翻訳を完成させている。

この期間、ロレンソは賢順と、どのような会い方をしていたかは不明だが、おそらく、前回と同じように、賢順が教会を訪ねて、ロレンソからグレゴリオ聖歌等を習っていたと考えられる。この期間は1年4ヵ月。

第3回 府内滞在（1558年5月～1559年9月2日）

第4回 府内滞在（1565年3月～6月）

第5回 府内滞在（1568年2月頃～1569年2月頃）

山口より書簡

秋頃から豊後の政治的事情は著しく好転した。その結果として受洗希望者が大きく増加した。山口においても情勢が落ち着いてきたようで、山口のキリシタンたちからトーレス神父に戻る様にと求める使いがきた。トーレス神父は戻りたかったが、毛利元就の情勢と諸般の事情をよく把握している大友義鎮は、今しばらく情勢の変化を見極めるために府内に留まるように勧めた。この判断は正しく、この後、山口における毛利の支配が確立するに従い、宣教師が山口に

戻ることは不可能になった。

『12月、山口の国王（大内義長）とその大身らは、同国よりキリシタンらを介して我らのもとの書状を送り、我らがかの国に戻ることを請うた。我らは、彼の兄弟なる豊後国王（大友義鎮）の許可と意見を仰ぐために彼のもとに赴いたが、それはデウスへの奉仕に必要な彼の好意を得るためであり、かつまた彼がこの地における出来事をことごとく知っているからである。彼（豊後国王）は我らに答えて、未だかの地に戻る時期ではなく、その時に至れば彼自らが伝えるであろうと述べた。我らは彼が戦に関して何か秘密を知っていて、時が答えを出すべく我らを待たせたのではないかと疑ったが、果たしてそうであった。すなわち某大身（毛利元就）がすでに復興している山口の町を攻め、市をことごとく破壊し、略奪を行い多数の人を捕らえ、さらに豊後国王の兄弟なる国王とその配下の大身全員を殺して自ら国主になったのである。』

*1557年11月7日付け、豊後発、コスメ・デ・トーレス神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 238～239頁

情勢を理解したトーレス神父は、ただ九州だけに全精力を注いだ。彼が府内の責任を持ち、ガーゴ神父に平戸を任せた。イルマンたちは二つの町、および豊後の他の土地のキリシタンたちのために援助をした。

12月、クリスマス（降誕祭）

『降誕祭が近づくと、我らは村々のキリシタンにその日取りと、全員が参集することを伝えさせた。市のキリシタンのほかに、八乃十里の多数の地区から大勢のキリシタンが降誕祭の夜のミサに訪れ、その余りの多さの故に修道院、すなわち教会と我らが宿泊している家々、さらにもう一方の地所にある教会にもほとんど入りきれなかった。我らは降誕を讃える数多くの歌とそれに関する説教により、ミサを執り行ったほか、終夜、説教をした。』

*1557年10月29日付け 平戸発、ガスパル・ヴィエラ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 252頁

7月以来、府内で始まった音楽訓練は、ギリエルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が指導して著しく上達した。ゴアの修道院で教育を受け、優れた音楽の素質と才能を持ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』に最も習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。ギリエルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が中心となり、早速、府内の子供たち、および音楽的才能のある新しい信者たちに音楽の訓練が始まった。この成果は、徐々にミサに反映され、主日ごとのミサが、読唱ミサから歌付のミサにおきかえられた。同年のクリスマスと翌年1557年の3月、受難週とそれに続く復活祭で、二つの聖歌隊が組織され、歌ミサが挙げられた。

1557年（弘治3）（ロレンソ 31歳）

3月、受難週と復活祭

前年 1556 年 7 月から、新しい音楽の指導者のもとで訓練を積んだ子供たちと新しい信徒たちの音楽教育も進んで、典礼聖歌が理解され唱和されるようになってくると、当然、聖歌隊が組織され、ミサでの司祭の応答が歌でなされるようになってきた。イルマンや同宿たちだけでなく信徒達を訓練した聖歌隊がいつどこで一番早く組織されたかは、必ずしも明確にはイエズス会の記録からは確認できない。しかし、この年 1557 年に府内の教会では、すでに聖歌隊が組織されていてミサを始め諸儀式はすべて歌唱を伴って行われていたようである。この年の枝の主日には、二組の聖歌隊が組織されていて、それに滞在中のポルトガル人数人と、5 人ずつの聖職者も加わり、相当数の人々によって合唱がミサの中で歌われたことが記録からわかる。

『歌ミサの後十字架を捧げてプロシッサン（行列）を行ったのち、神父は十字架と共に聖堂の外に留まり、われわれは中に入って戸を閉じて唱った。そして神父が門を開けと言った時、聖堂内において「オルガンの歌」で、大きな信心をこめて三回唱して、戸を開き、すべてに人々は大きな喜びに満たされた。行列をしてから聖壇に進み、ミサを始め、御パッション（受難）の時となって、歌声は盛り上がった。われわれは聖務日課 *officios* すべてを歌唱して行ったが、水曜日には晩課 *treuas* を唱い始めると、二つの聖歌隊には同地において冬を過ごしたポルトガル人数人も参加した。定刻となってオノオノ数人ずつ聖歌隊に加わり跪いて高声に歌唱した。オルガンの歌のベネディクトゥス *Benedictus* をもってプサルモス *Psalmos*(詩篇歌)を終り、つぎにミゼレーレメイデウスを唱ったが、その時、聖堂内にいた沢山のキリシタンらは多くの涙を流し信心を表わした。』

*1557 年 10 月 29 日付け、平戸発 ガスパル・ヴィエラ神父の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第 I 巻 255～260 頁

朽網と府内周辺に布教する

3月、復活祭が過ぎた頃

『本年（1557 年）復活祭が過ぎた頃、ガスパル・ヴィエラ神父はロレンソ修道士を伴って山の地方（朽網）に赴き、老齢のため、或は仕事のため（修道院に）来ることができない者数名の告白を聴き、豊後（府内）の周辺で若干名をキリシタンにした。多数のキリシタンがいる 5, 6 ヲ所の村と、教会に来ることができない数名を毎年訪問し、彼らが回心するように数日説教を行う。このことは年に数回なされている。過ぐる年（1554 年）の四旬節に、バルタザール・ガーゴ神父とフェルナンデス修道士が、当初から 9 里の朽網に滞在し、多くの成果を収めた。朽網のキリシタンらは、彼らの領袖であるキリシタン（*ルカス・朽網宗策）の家に祭壇があり、毎日ミサと説教を行い、夜は連禱を唱え、苦行をなす。連禱（を唱えること）と、金曜日の夜の苦行は彼らの習慣になった。』

*1559 年 11 月 1 日付け 豊後発、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第 I 巻 287～288 頁

『説教をするために恵まれているのはジョアン・フェルナンデスとルイ・ペレイラ (Rui Pereira) です。説教すればするほど徐々にロレンソもそのようになるでしょう。話し方が生き生きしていますが、声色は優しくはありません。彼は説教台を使います。』

*1559年11月1日付け 豊後発、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

Baltasar Gago S.,J.,府内、M.H.148 “Documentos” p.177,179,181,

『1554年、バルタザール・ガーゴ神父とフェルナンデス修道士は、一人の主要な人物に懇請されるまま、府内から9里距足り、非常に高い山の上にある朽網へ赴いた。その人は説教を聞き家中こぞって洗礼を受け、その数は百名余りに及んだ。彼は*ルカス (朽網宗策) の教名を授けられた。ところで彼はその地の全住民にとって父のような人であり、我らの主なるデウスが恩寵を授け給うたので、かれはそこでつねに堅実で確乎たる支柱的存在であった。彼は邸の傍に教会を建てたが、それはこの豊後国で建てられた最初の教会であった。彼はそれを喜びとし、清潔に、また良く整えるなど自らその世話をした。この善良な老人には親戚が多かったが、彼の模範的な生活と堅固な信仰によって、その縁者、友人たちもキリシタンとなり、その後まもなく彼に説得されて洗礼を受けたものは300名に達した。』

*ルイス・フロイス『日本史6』大友宗麟編I第11章(第I部12章)112頁

他の人々によって報告された同様の出来事の記事

*1559年9月23日付け 豊後発、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第III期第I巻186～187頁

*1555年9月20日付け デュアルテ・デ・シルヴァ修道士の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第III期第I巻209～210頁

*ルカス・朽網宗策

『朽網』地方の名は、今では聞かれない地名だが、かつて小さな集落、有氏、岳麓寺、七里田、栢木、下河原、原、新田、湯原の周辺は『朽網』と呼ばれていた。

当時から、炭酸を有する温泉の湧出するこの地方を治めていたのは、大友氏の重臣の朽網鑑康(宗歴)で、有氏の山野城の城主だった。

ザビエルが大友宗麟から府内に招かれた2年後、1554年(天文22)2月に、ガーゴ神父とフェルナンデス修道士が最初の布教を行った。この布教は、大友義鎮の家臣で、朽網に住んでいたアントニオ(洗礼名)(府内へ来たときトーレス神父の教えを受けて改宗した)の要請によるものだった。アントニオからすでにキリスト教の教えを聞いていた朽網殿は、熱心にキリスト教を住民に奨め、朽網宗策自身も説教を聞きキリスト教を受け入れて改宗し洗礼を受け、『ルカス』と言う洗礼名与えられた。この時260名が洗礼を受けた。1562年には『ルカス』は豊

後で最も大きい教会堂を建築して寄進している。

『豊後（府内）より、9 レグワの朽網に、名をルカスというもう一人のクリシタンがいて、また自費でもって、はなはだ良き大会堂を建設して寄進した。また、死者を葬るため木をもってひとつの地所を囲い、中央に石の大十字架を建て、自分が死んだとき、十字架の下に埋葬するように命じた。』

*1562年12月10日付け、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 頁

その後、朽網地方の信者は急増して、ついには当時の日本で「キリスト教八大布教地」とまで言われるようになった。

ロレンソ、ヴィレラ神父と共に平戸に布教に行き両親に洗礼を授ける

9月

1556年9月以来、平戸において一人で布教活動をしていたガーゴ神父は1557年に2隻のポルトガル船が平戸に入港して、神父はポルトガル人の世話のために忙しく働いていた。

トーレス神父は、ロレンソが長年抱き続けていた両親の改宗と洗礼の願いを叶えさせるために彼をヴィレラ神父と共に使わした。生まれ故郷に戻ったロレンソは、この数年間抑えていた両親に洗礼を授けるために両親の改心を心から願い両親に福音を説いた。ロレンソの熱心な誠意により両親は洗礼をヴィレラ神父から受けた。

ヴィレラ神父がロレンソの誠実で熱心なその横顔を描いている。

『数多いポルトガル人が告解し、御聖体を受けました。私（ヴィレラ）は、ポルトガル人たちには日曜日や祝日に説教していました。日本人のためこの土地の出身であるひとりの日本人（ロレンソ）も同じようにしています。視力が弱く、わが主は御憐れみによって多くの恵みをお与えになり、彼は他の人々を照らしたく思っているし、実際に多くの人々が照らされています。』

*Gasapar Vilera S.J.平戸発、1557年10月29日付け M.H.137 “Documentos” p,710~711

11月、ガーゴ神父、平戸より博多に赴任する。

大友義鎮が博多に、教会の土地を与えてくれて、九州で一番賑やかな博多の町での布教ができる条件が整った。1557年（弘治3）8月、大友義鎮は府内教会を訪れた。彼は住院と教会堂を見て大いに満足して、宣教師たちや府内に滞在中のポルトガル人たちと夕食をともにしながら歓談をした。歓談終了後、義鎮はトーレス神父に対して博多の町に住院を建てるために土地を与えろと言われた。念願だった博多の町に土地をもらったトーレス神父は、早速伝道を開始するために、平戸の駐在していたガーゴ神父に、博多に行き開拓伝道を始めるように指示した。

『バルタザール・ガーゴ神父は、豊後の王が、住院ならびに会堂を建てるため我らに与えたる

地所を受け取るために、コスメ・デ・トーレス神父の命により当地【平戸】を発って博多に向かいました。』

*1557年10月28日付け、ガスパル・ヴィレラ神父の書簡

『豊後の王（大友義鎮）は、また当地（豊後）より5日路にある商業の盛んなる博多の大市においてひとつの地所を与えた。ガーゴ神父は博多に赴任してデウスの教えを説きなさい。ヴィレラ神父は、ガーゴ神父に代わって平戸に駐在しなさい。』

*1557年11月7日付け 豊後発 コスメ・デ・トーレス神父の書簡

平戸における布教

ヴィレラ神父とロレンソの宣教はポルトガル船の停泊していた平戸の港周辺だけではなく、他の土地でも、特に熱心な信者であり、武士であった籠手田一族の知行地でも行われた。その知行地は、主に生月、度島と平戸島に西海岸の根獅子、獅子、平、春日等である。ロレンソの生まれた白石は、春日の北側、生月に面した海岸の小さな入り江にたたずんでいる。

籠手田一族は安昌、安経、安一の三代に渡り、この地のキリシタンの中心となって、宣教師を保護し、教会を支持し、信徒たちを励ましてきた領主である。特に籠手田安経はドン・アントニオと呼ばれて、安経の弟は一家の養子となり、ドン・ジョアン勘解由と呼ばれていた。籠手田・一部両家の領地である生月島、度島と平戸島に西海岸の根獅子、獅子、平、春日等の領民は全員がキリシタンになった。

ガスパル・ヴィレラ神父が平戸に到着の後、若い領主籠手田安経・ドン・アントニオは自分の領地を案内して領民の回収を進めるために、村々を巡回布教した。巡回の時に起こったロレンソと浄土宗の僧との宗論は、ロレンソの仏教に関する知識と理解力、および比較宗教力、弁舌の巧みさを見事に表している。回心した人々が二度と仏像を拝まないようにするため、また回心した仏僧の寺や神社から仏像を持ち出してうず高く積み上げて焚火をたいた。仏寺を教会堂に改めて信徒の祈りの集会場所に替えた。これがこの地方の布教の初めである。

ロレンソ、度島において浄土宗の仏僧と宗論する

『この時、平戸には、浄土宗という阿弥陀の宗派のひとりの仏僧がいたが、彼はつい先頃そこに来たのであった。彼は説教の際、聴衆に向かい、デウスの教えやキリシタンのことについて幾多の悪口を語るのが常であった。ドン・アントニオ（籠手田安経）は、当時まだ若く、大いなる熱意をもって布教事業に率先して、家臣のうちで受洗しない者が一人でもいることに我慢ならないほどであったが、彼は、度島において、数日前にやっと洗礼を受けたばかりの新改宗者に教えを授けていたガスパル・ヴィレラ神父の許へ伝言を届けさせた。その中で彼は司祭に、例の仏僧が公然と講壇においてデウスの教えを中傷し、何びともあんな悪い宗派に入ってはならぬと言っている。ついては誰かを遣わして、その仏僧に答弁するよう取計っていただきたい、

と報じた。この時、ドン・アントニオはキリシタンになってまだ満一年と経っていなかった。ところで当時、ロレンソ修道士がそこにいたので、司祭はかの仏僧を訪ねさせるため、修道士を平戸に派遣した。ドン・アントニオと、その兄弟ドン・ジョアン（一部勘解由）、ならびに他の身分の高いキリシタンたちが、ロレンソ修道士を、折から仏僧が説教していた場所に連れて行った。説教が終わったとき、ロレンソ修道士は自分が説教で聞いたことについて、何がしかの疑問を持ち出した。仏僧はそれに対して全然答える術を知らず、キリシタンの教えについて何も誇った覚えはないと否認した。さて日本の僧侶の習慣では、誰かが宗論で打ち負かされると、勝者は敗者から、衣と称される、非常に尊ばれている上衣を剥ぎとることになっている（それは敗者にとっては大いなる屈辱であり不名誉な事であった）ので、ロレンソ修道士は僧侶に向かい、「日本の習慣によれば貴僧の衣を剥ぐところだが、皆が、貴僧が打ち負かされたと白状するのを知ってくれば満足いたそう。なぜならば、デウスの教えを弘める人々は、何人も辱めようとはしないのだから」と。』

*ルイス・フロイス著『日本史 6』大友宗麟編 I 第 16 章（第 1 部 18 章）166～168 頁
 ガスパル・ヴィレラ神父が豊後から平戸に派遣された次第、ならびに同地で生じたこと

ヴィレラ神父、仏像を集めて焼く

『ポルトガル人が訪れ、もっとも長く滞在する港である平戸について、この所領では、メストレ・フランシスコ【ザビエル】師が訪れた時、キリシタンになった人々があり、その後、絶えず増えていった。1557 年、ガスパル・ヴィレラ神父が同地に十ヵ月滞在した。土地の重立った者三名の内ひとりにはキリシタンで名をドン・アントニオ（籠手田安経）といい、平戸の港の周辺 2, 3 里にある 3, 4, ヲ所の土地と幾つかの小島を有している。1557 年にこの領主は司祭の勧めに従って、未だ帰依していない農民と家臣数名、および家族一同をキリシタンにした。キリシタンの人数は総勢 1500 名内外である。彼は司祭に伴って村々を歩き、説教をして改宗を勧め、寺院から偶像を取り去って教会に変え、幾つかの場所に墓地を造って、死者のために大きな十字架を建てた。この事業がことごとくキリシタンのものとなるよう、大小の偶像を焼き払ったが、これは偶像の下僕らもまたキリシタンになったためである。』

*1559 年 11 月 1 日付け、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 III 期第 I 巻 297 頁

『ところで平戸では、仏僧たちの反抗と肥州（松浦隆信）の無言の憎悪から、大勢の改宗を期する余地はまったくなかった。それゆえ司祭【ガスパル・ヴィレラ】はドン・アントニオ（籠手田安経）と語り、彼の支配下にある島々で、その家臣たちをキリシタンにするのがこの際適切だと言った。ドン・アントニオ（籠手田安経）は司祭の企てに同意し、さっそくそのことが着手された。度島、生月の島々と【平戸島の】獅子、飯良、および春日で説教がはじめられた。そして人々が受洗し、デウスのことについて良く理解したことを示すにつれて、司祭は（彼らの許に見られる異教の古い根を少しでも早く引き抜こうとして）あちこちの寺社からどんどん

偶像を集めさせ、堆く積みあげ、それでもって非常に大きい焚火をたいた。

平戸に住んでいた仏僧たち、ことに安満岳と志々岐山という二僧院の上長たちはこれを知り、仏像に対するそうした侮辱を、自分たち自身に対するものと見なし、すべての他の僧侶やその檀家のひとびとを召集してこう言った。「我らは、仏様に加えられた、かくもひどい辱しめを黙ってはおれぬ。いわんや一人の異国人によってそんなことがなされては」と。彼らは激怒しつつ、平戸の殿である肥州（松浦隆信）の許に出かけ、もし殿が伴天連を処罰し、相当の懲罰を彼に加えなければ、殿自身が危険に曝され、家臣の間に叛乱が勃発するであろうと言った。肥州は実のところ、つねに日本においてデウスの教えをもっとも、激しく、かつもっとも増悪する敵のひとりであって、進んで司祭を殺したいところなのだが、敢えてその挙にでないのは、ポルトガル人が自領に来航することから期待される利益のためであり、またその他のもっとも主要な人物であるドン・アントニオ（籠手田安経）とその一族を畏怖するためである。そこで彼（松浦隆信）は仏僧たちの感情を和らげ引き留めようと、司祭を呼びにやり、彼にこう言った。「民衆の間に叛乱の兆しと不穏な空気が濃厚だし、彼らは予の領内の各地で切支丹宗門への改宗が行われることを望まぬゆえ、伴天連殿は当地を退かれる必要がある。後日、彼らをもっと平静に復するならば、その時には、予が貴殿を呼ばせるであろう。」と。

かくて彼（ヴィレラ神父とロレンソ）は追放され、そこから博多を経て豊後に帰還した。』

*ルイス・フロイス著『日本史 6』大友宗麟編 I 第 16 章（第 I 部 18 章）160～162 頁
 ガスパル・ヴィレラ神父が豊後から平戸に派遣された次第、ならびに同地で生じたこと

『ガスパル・ヴィレラ神父は布教にいと熱中するあまり、仏の像や、日本の諸宗派の書物などの荷物を俵に詰めて海岸まで運んで行き、そこでそれらを積みあげ、火をつけた。キリシタンの信仰をよく教わっていた人たちは、それによってますます信仰を強められたが、デウスの教えについて、たいして知識がなかった人たちは、この行為を見、それに対して神と仏の大いなる懲罰が下されようと恐れ、いとも戦慄し驚愕するところとなった。』

*ルイス・フロイス著『日本史 6』大友宗麟編 I 第 16 章（第 I 部 18 章）166 頁
 ガスパル・ヴィレラ神父が豊後から平戸に派遣された次第、ならびに同地で生じたこと

平戸において、領主・松浦隆信は禅宗に厚く帰依していて、浄土宗・真宗・真言宗の如き仏教諸派は手厚く保護されていた。特に安満岳の西禅寺が領主松浦隆信に対して強力な勢力を持っていた。

『ヴィレラ神父は日本に到着する 6 ヶ月前にイエズス会に入会したばかりだった。ヴィレラ神父の人々の靈魂をキリスト教に改宗させたいとの熱意は異常なもので、どうすればデウスへの奉仕を一層よくできるか、何か新しいことをすることができるかと、何時もそれについて思いめぐらしていた。』

*ルイス・フロイス著『日本史 6』大友宗麟編 I 第 16 章（第 I 部 18 章）160 頁
 初めて与えられた布教地・平戸での、35 歳前後の若いヴィレラ神父の布教未経験からくる未熟

差と、彼の結果を求める異常な熱心さが引き起こした仏像焼却事件は、平戸地方の仏教界に大きな衝撃を与え、この事件が発端となって仏教徒との間に衝突が起きてしまった。ヴィレラ神父はロレンソの仏僧との宗論の結果に対するロレンソの取った寛大な処置を見習うべきだった。1558年になって仏教徒が起こしたキリシタン廃絶運動の結果、仏教側とキリシタンが対立して大事に至る不穏な情勢になったので、領主・松浦隆信はヴィレラ神父に情勢を説明して退去を求めた。この事件が発端となり、この地方のキリシタン多数がヴィレラ神父に従って豊後へ避難移住した。この時キリシタンになったマリアお仙は、信仰を守って仏教に戻らなかったのも、主人である仏教徒の武士に切り殺され殉教した。1559年、日本最初の殉教者となった。

1558年（永禄元）（ロレンソ 32歳）

4月頃、ロレンソ、ヴィレラ神父、平戸を追放

ヴィレラ神父とロレンソは、仏教徒からの迫害を避けるために住み慣れた土地や家を捨ててまで、信仰に生きる道を選んだキリシタンたちと共に博多経由で豊後府内に向かった。おそらく、ガーゴ神父から、博多の住院と教会堂が間もなく完成して復活祭を祝うので、豊後に帰る時に博多に寄るようにと打診があったものと思われる。

博多の教会での初めての復活祭

『1558年復活祭（4月11日）が終わって、豊後の王（大友義鎮）は、海に面した地所を与えた。同所には農夫が60人いる。トーレス神父は住院および教会堂建設のために自分【ガーゴ神父】とイルマン・ジョアン・フェルナンデス（よく日本語を解せる）を（豊後より）派遣した。住院と教会堂が落成して多数の人々が説教に集まり、キリシタンになる人々が少しずつでき始めた』

*1559年11月1日付け、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 頁

ロレンソ、3度目の府内滞在（1558年5月～1559年9月2日）

5月、ロレンソ豊後府内に戻る

1557年9月、平戸においてデウスの教えを述べ伝えようと勇んで出かけたヴィレラ神父だったが、35歳前後の若いヴィレラ神父の布教未経験からくる未熟差と結果を求める異常な熱心さが引き起こした仏像焼却事件は、平戸地方の仏教界に大きな衝撃を与え、この事件が発端となって仏教徒との間に衝突が起きてしまった。ヴィレラ神父の初めての布教地・平戸において起こした仏教徒とキリシタンとの対立との結果、領主・松浦隆信より退去を要求され、仏教徒による迫害を避けるために、多くのキリシタンたちが豊後府内に移住してきた。平戸における10ヵ月の布教活動は多くの問題点を残した。キリストを受け入れキリシタンになった人びとは信仰について各々考え、それぞれに答えを出した。ある人々は信仰を優先させるためと迫害を避けるために、住み慣れた故郷平戸の地を棄てキリストにある自由を求めて新天地の豊後に来た。

またある人々は、信仰を持ったままで平戸での生活の基盤を維持しようと決め、近い将来に起こると予測される仏教徒からの迫害に対するために、いっそう信心を新たにして信仰を深め、残った信者たちで相互扶助組織・コンフラリアを組織した。

ロレンソの府内での仕事

『日曜日毎に受洗希望者に説教する人は日本人ロレンソと、デュアルテ・ダ・シルヴァならびにジョアン・フェルナンデス両修道士であり、彼らは過ぐる夏から今に至るまで続けている。その方法は、福音書に基づいて道德上の教えを二つ、三つ説き、終わりに我らの主（なるデウス）が我らのためになし給うた多くのことについて談話（すること）であり、（次に）日本語で総告白をするが、皆これを心得ており調子を合わせて応誦する。』

*1559年11月1日付け、バルタサール・ガーゴ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 286頁

ロレンソの教会での役目

『もう一人の日本人、イルマン・ロレンソは我が主の御教えについては深い知識を持っています。ミサの後、洗礼の準備をしている数人に、また、受洗したばかりの他の人にも1時間ほど、または必要な時間を費やして話をします。または質問してくる信者の疑問にも答えます。』

*Gaspar Vilela 府内発、1557年10月29日付け、M.H.vol.137 “Documentos” p.798

府内ではロレンソは以前1556年5月に府内に来てから携わっていた説教活動と、受洗を希望する人々に教理を教えていた。

この仕事の他に、また、来日して間もない宣教師たちに日本語の手伝いをするように頼まれた。ロレンソは、ポルトガル語も知らず、目が見えないために字の読み書きもできないので、さまざまな問題にぶつかったであろうが、その困難な務めも引き受けた。

ロレンソが翻訳したガーゴ神父著の25箇条

平戸教会の責任者だったガーゴ神父は、平戸在任時にキリスト教布教の助けとして、問答形式の簡潔で明瞭な教理要綱を考え小さな冊子として著わした。ヌニェス神父が豊後に滞在していた時に、ガーゴ神父の草案を訂正していた。平戸で形を成していた冊子を、豊後に持ち帰り、トーレス神父の意見も取り入れて更に読みやすく改良し、ロレンソの助けを借りてその冊子を日本語に翻訳した。この冊子の翻訳は、ロレンソにとっても大きな助けとなった。今迄のロレンソの布教するときの教理の教え方が、この教理冊子の作成の過程に参加したために、ロレンソにとって、ガーゴ神父の教理の説明の方法や本に書かれている事柄全てが、ロレンソ自身のものとなった。ロレンソのずば抜けた記憶力は冊子に書かれているすべてを記憶した。この知識は、すぐに府内の教会で信徒たちを教える教育の現場で活用された。

『平戸においてバルタザール・ガーゴ神父は、カテキズモ（問答）形式の一冊子を著わした。

その題は 25 カ条の教えと称されたが、それは 25 章から成っているからである。ドン・アントニオ籠手田（安経）殿は肥州（松浦隆信）に次いで平戸でもっとも高貴な殿で、当時すでにキリシタンになっていたが、たいへん年をとっていた彼の父（安唱）は、そのことを聞くと、小冊子を切に見たがった。彼はその内容にいたく満足し、それを読んだだけで決するところがあってキリシタンになることを決意し、実際にそれを行い、ドン・ゼロニモという教名をもらった。それは仏僧たちを非常に驚かせた出来事であった。』

*ルイス・フロイス著『日本史 6』大友宗麟編 I 第 16 章（第 I 部 18 章）159 頁

ガスパル・ヴィレラ神父が豊後から平戸に派遣された次第、ならびに同地で生じたこと

ガーゴ神父が著した『25 カ条の教え』がどのような冊子だったのか、実物が残されていないので内容や文体等について詳しくはわからない。ザビエルが 1549 年、日本に来たとき、彼がインドで使用していた 29 カ条のドチリナを用意して使用した。ザビエルが参考にしたバロシュ（Joao de Barros）著の 33 カ条のドチリナは幼児教育のために編成した文法書の付録だった。バロシュのドチリナに、ザビエルはインドの現状に合わせるために手を加えて 29 カ条とした。この 29 カ条のドチリナはザビエルの宣教の基礎となりインド、インドネシア、マラッカで使用され、また各地方の言葉に翻訳された。

日本に持ってきて使用したザビエルのドチリナは、翻訳文も未熟で、宗教用語に仏教用語を使用していたので混乱が生じ、山口で用語の改正を行い、キリスト教の神の概念を表わすために『神』をラテン語の『デウス』と表現した。この時の改正に、当時、山口にいた宣教師団の中で、ただ一人の日本人である仏教用語に詳しいロレンソの知識が生かされた。ガーゴ神父が平戸でこのドチリナの改正に取り組み始めた背景には、ザビエル時代から布教に伴って増えたキリシタン用語の統一化があった。この用語改正を徹底させ、50 語ほどのキリシタン用語を決めた。ガーゴ神父がこの改正のことを 1555 年 9 月 23 日付けの書簡で詳しく述べている。このキリシタン用語改正に伴い教理書の改訂も必要となってきた。1555 年 7 月、日本に来たヌニェスにより、ザビエルの使っていた古い教理書の使用が禁止された。ヌニェスが新しい 25 カ条の教理書の草案を書いて、ガーゴに完成させるように指示したと思われる。平戸にロレンソが遣わされたのは、ロレンソの長年の希望である両親の改宗を叶えさせるためと、もう一つの目的としてガーゴに任されている 25 カ条のカテキズモの完成と（すでに山口でロレンソがザビエルの 29 カ条の修正と翻訳に携わった経験があるので）翻訳を推し進めるためであったと思われる。籠手田安経の父・安唱に手渡された 25 カ条のカテキズモは、おそらくガーゴが冊子の構成を完成させ、ロレンソが翻訳し、祐筆に書かせたものであり『完成に近い冊子の見本・初稿』を献上したと思われる。

*参考文献

フーベルト・チースリク著『キリシタンの心』第 1 章キリシタン時代の教理書 13～21 頁

ロレンソ、ヴィレラ神父と共に都に布教に行く

1559年（永禄2）（ロレンソ 33歳）

9月8日、ロレンソ、ヴィレラ神父と共に都に布教に行く

『ガスパル・ヴィレラ神父は、（当地から）150里の所にあつて、日本のいっさいの文化がある都に派遣された。これは司祭（トーレス神父）がかなり以前から切望していたことであり、学に長じて才知あり、はなはだ鋭敏な日本人で、デウスおよび日本の諸事を理解することにおいては彼に勝る者はない。彼はメストレ・ベルショール師が作成し、まさしく彼ロレンソが日本語に翻訳した、一書を携えている。主（なるデウス）が御慈悲によりかの地の人々に道を開き、己の無知を悟って向上するため、光明を授けんことを。彼らが出発しようとしたとき、コスメ・デ・トーレス神父はこの事業のため諸人に霊的な助けを請うように言い、度々ミサを行い、詩編を七つと、そのほかの祈りを唱えた。こうして、彼らは本年の9月8日に豊後を發ち、深い信心と涙をあらわにしつつ諸人に別れを告げた。』

*1559年11月1日付け、バルタザール・ガーゴ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 291～292頁

『私はロレンソと称する日本生まれの修道士を同伴するが、それは議論や談話を行う際の通訳にするためであり、その他主への奉仕となる事柄に用いるためである。というのも、私は（当国の）言葉を解するが、結局私の母国語ではないし、彼にとっては生来の言葉だからである。』

1559年9月1日付け、ガスパル・ヴィレラ神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 309頁

『全員の意見を徴した上で、ガスパル・ヴィレラ神父が都地方に赴くことが決定された。彼は外見が神父としてではなく神父のしもべの姿で、神父様がここに滞在していた当時、私に手紙を送った僧侶（大泉坊）宛の手紙を携えて行きます。あのとき彼がつたえたことが本当かどうか確かめるために行きます。そして、計画は予定どおり実行されました。』

*1560年10月20日付け、コスメ・デ・トーレス神父の書簡

『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 313頁

35歳前後の若いヴィレラ神父の布教未経験からくる未熟差と結果を求める異常な熱心さが引き起こした仏像焼却事件は、平戸地方の仏教界に大きな衝撃を与え、この事件が発端となって仏教徒との間に衝突が起きてしまった。ヴィレラ神父の初めての布教地・平戸において起こした仏教徒とキリシタンとの対立との結果、領主・松浦隆信より退去を要求され、仏教徒による迫害を避けるために、多くのキリシタンたちが豊後府内に移住してきた。平戸における10ヵ月の布教活動は多くの問題点を残した。

平戸においてヴィレラ神父の取った軽率な行動に対して、トーレス神父から布教地における行動の大切さを諭されたヴィレラ神父は、自分の取った行動がもたらした重大な結果についての自己反省をした。京都での布教という最大の使命を任されたヴィレラ神父は、平戸で起こした

事件の反省を踏まえて、京都への旅立ちの前にヴィレラ神父は神父の証しである自分の髪の毛と髭を剃って、旅する僧侶が用いる着物に似たものを身につけて旅だった。同行者はイルマン・ロレンソ、若い同宿のダミアン、この青年は博多で受洗した学識のある青年で、後にイエズス会に入りイルマンとして立派な活躍をした。案内役として、比叡山の麓、琵琶湖湖畔の町、坂本出身で中国の上川島(ザビエルが死んだ島)で受洗したディオゴという京都の信者であった。彼らが携えていく冊子は、ガーゴ神父が著して、ロレンソが日本語に翻訳した『25カ条のカテキズモ』を持って行った。1559年9月2日、府内の沖の浜から船に乗り、途中色々と問題はあったが、神の御加護のもと無事堺に入港した。

京都における第一の時代・1559年～1565年

五畿内教会の誕生と京都での試練と宣教

都地方におけるキリシタン宗門の伝道が開始されたが、豊後九州と違うのは五畿内においては領主層のキリシタンが出現した。領主のうちのキリシタンの有力者は、南蛮貿易とは無関係に都地方におけるキリシタン領主層は、1563～1564年(永禄6～7)になされた大和・河内における一連の改宗や、1550年代に行われた布教に基づく改宗者を含む結果として出現した。

大和・河内における改宗

1563年(永禄6)、ロレンソ了齋は、宗門弾劾を企図した老天文学者の結城山城守等に招かれて奈良で説教した。この時の説教は参会者に大きな感銘を与え、大和・河内の小領主層を多数入信させた。受洗者には、**結城山城守忠正**、**高山図書飛驒守**、公家の**清原枝賢**がいる。

翌年、1564年(永禄7) **三箇伯耆守**、**池田丹後守**、**高山図書飛驒守**嫡子の**高山右近**が改宗した。大和・河内における領主層の改宗と同領地におけるキリシタン領主たちの政策の方針は、以後の畿内におけるキリシタン大名領国形成の前提となった。

結城山城守の洗礼名アンリケ、一族には**結城弥平次**(後の肥後矢部の愛藤寺城、島原金山の結城城の城主)河内岡山を領した**結城ジョアン**(1572年受洗)がいる。

高山図書飛驒守の洗礼名はダリオ、大和沢城主。嫡子右近の洗礼名はジェスト、高山父子はその後摂津高槻を領し、右近の代には播磨明石6万石を所領した。

三箇伯耆守の洗礼名はサンチョ、河内国三箇領主。領内に教会を建て寺社の破壊と領民の改宗を勧めた。本能寺の変後、明智方に同与して没落、同地のキリシタン集団は離散を余儀なくされている。

池田丹後守の洗礼名はシメオン。河内若狭の武将で、同地に教会を建てイエズス会に地所を寄進した。

高山右近の影響

高山右近は豊臣秀吉に属し、同配下の武将たち、**蒲生飛驒守氏郷**、**黒田官兵衛孝高**、**市橋兵吉**、**牧村長兵衛**、**小西行長**、**京極高吉**等が高山右近の感化と布教活動によりキリシタンとなった。

蒲生飛騨守氏郷の洗礼名はレアン。近江日野から伊勢松島を経て、会津若松に所領を賜った。蒲生飛騨守氏郷が会津若松に来たことで、東北地方にキリシタンの教えがもたらされて布教活動が進展した。

黒田官兵衛孝高の洗礼名はシメオン。播磨から豊前中津に領地替え、嫡子長政の代に福岡・博多の地 52 万石を賜り、博多、秋月にはレジデンシアが置かれるなど筑前筑後豊前地方のキリシタンの拠り所となった。

市橋兵吉は美濃に領地を賜った。**牧村長兵衛**は近江で所領を得ている。

小西行長の洗礼名はアゴステーニョ。行長は父小西隆佐（堺の政所）の影響のもとで入信。

小豆島、室の津等の領民の改宗に力を尽くした。1587 年（天正 15）7 月、博多筥崎宮に於いて豊臣秀吉が出した『伴天連追放令』に伴う高山右近の棄教拒否と播磨明石 6 万石没収後、小西行長は高山右近を小豆島に匿った。肥後に増転封された。小西行長の時代、天草はキリシタンの拠り所として多くのキリシタンたちが移住してきた。1600 年、関ヶ原の戦いで西軍に付き敗北、京都の三条河原にて斬首され、領地の肥後は加藤清正に譲られた。

京極高吉は近江上平城城主。改宗した一族により、近江近辺にいる宣教師たちへの援助がなされた。

高山右近はキリシタン理念に基づく領国形成を明確に推進した。摂津高槻で領内の寺社仏閣を破壊ないし教会に転用して、領民の集団改宗を進め、弱者救済のために様々な対策を講じた。移封先の明石でも、領民の改宗を進め、同地でのキリシタン宗門の浸透を進めている。右近は、領民への宣教による靈魂の救済を最終目的としていた。信仰を持たせることが全世界に勝る最高の価値であるとの信念を持って領国の政策を押し進めた。

九州での布教・1565 年～1569 年

1565 年（永禄 8）（ロレンソ 39 歳）

ロレンソ・4 度目の府内滞在（1565 年 3 月～6 月）

3 月

ロレンソ、アルメイダとパウロ養方と共に京都より豊後府内に赴く。

ロレンソ、府内教会で説教をして受洗前の信徒達に教理を教える。

6 月

ロレンソ、アルメイダと共に、島原半島の口之津に赴き、トーレス神父の手伝いをする。

その後、大村領へ移り布教に専念する。

1566 年（永禄 9）（ロレンソ 40 歳）

1 月 13 日

五島列島の大名・五島淡路守純定は、口之津のトーレス神父に宣教師を派遣するようにと手紙を送った。トーレス神父は降誕祭の後にロレンソとアルメイダと遣わそうと思ったが、長く居

座った吹雪と寒波のために、派遣が2週間遅れてしまい、年を越えて1月になった。

1566年1月13日、ロレンソとアルメイダは口之津を出て長崎の福田港まで行き、船を乗り換えて8日間の海路の後、1月下旬、福江港に着いた。ロレンソはアルメイダと共に福江、奥浦において布教が始まった。この時から、五島列島の教会の歴史が始まり、その歴史は現在まで続いている。ロレンソとアルメイダは共に助け合って働き、ロレンソが説教を受け持った。後日、ロレンソひとりで一年の間、布教をしなければならなくなった時、ロレンソは信者の小さな共同体を作り、相互扶助組織の中でミサを継続した。最後にモンティ神父を手伝って、五島純定の息子、五島純堯の洗礼の準備をして、ロレンソは五島での活動を終えた。

『金曜日の午後、私（ルイス・デ・アルメイダ）は祭服をまとい、日本人修道士一人（ロレンソ）を伴った。彼は当地で我らが擁する最良の通訳であり、信仰のことに精通しており、日本人からは非常に思慮深い人とみなされている。14年前からイエズス会に在籍している。領主より使者が遣わされてきたので、我らは彼の邸に赴き、はなはだ大きく、明るく照らされた広間に入った。そこには男はおよそ400名いるほか、この広間に隣接する別の部屋には婦人がいた。部屋は幾つかの非常に薄い板の戸によって仕切られているが、説教を聴くため（板戸を外して）全体を一つの部屋にしている。この部屋は甚だ清潔で、よき敷物が敷かれてあり、部屋の一方に高い場所がある。領主は我らをそこに上らせ、彼もまた我らと同じ場所についた。諸人が着座して静まると、私は修道士（ロレンソ）に、まず初めに彼が話し、多くの理由を挙げて説教を注意深く聴くことを人々に勧めるよう言った。次いで私は彼らの言語に通じていないので説教するのは私でないことを詫びながら、修道士（ロレンソ）が説くことは私が彼を介して述べていることであると（言い）。かくして修道士に説教を始めるように命じた。彼（ロレンソ）の話は大胆かつ軽妙にして明解なものであり、万物の原因たる創造主（の存在）を立証し、彼らの神々が現世においても来世においても彼らを助けることができないことを数多くの理由により証明してこれを打破する上で、彼の示した道理はいとも明白であったが、私は彼の至福なる使徒（パウロ）のことを思い起こした。彼が述べたことは当地で我らが常に説いていることであって、驚くには当たらないが、ただ、彼が（述べたことの）すべてを人々に理解させる際の軽妙さと明瞭さや、人々が彼の言葉を認めざるを得ないようにする話術には感嘆させられた。またいっそう明白にするため、彼は自ら異教徒（の立場）になり、彼自身の（先に示した）道理に反駁した後、極めて明確に疑問を解いたので、説教が終わると（3時間続いたであろう）諸人は驚嘆し、崇拜すべきはデウスであると認めるようになった。』

*1566年10月20日付け 志岐の島発 ルイス・デ・アルメイダ修道士の書簡

『16・17世紀イエズス会日本年報集』第Ⅲ期第Ⅲ巻122～123頁

5月

アルメイダ、病気のために単身口之津に帰りトーレス神父の許で静養する。

ロレンソ、単身、奥浦に残り布教活動に専念する。

モンティ神父が 12 月中旬に五島福江に着いて領主・五島純定に挨拶に行った後、ロレンソを訪ねて奥浦へ行ったとき、ロレンソの布教によって奥浦の住民は全員キリシタンになっていた。『そこ（奥浦）では住民は皆、信者であった。』『ここの信者は私が着いたことによって大きな慰めを受けました。この港（奥浦）には、すでに茅葺き屋根の小さな家が建っていて、そこにはロレンソという日本人が住んでいました。』

12月20日頃

モンティ（Giovanni Battista de Monte）神父が五島に着任、単身奮闘していたロレンソに協力して、初めての降誕祭【クリスマス】のミサを捧げる。

『私(モンティ神父)はできる限りきれいに降誕祭の夜中のミサのために祭壇を準備しました。ロレンソにはミサの奥義のことを手短かに説明するように、またそれにはどれほど尊敬と落ち着きをもって与らなければならないかを教えるように頼みました。皆は初めてミサに与っているからでした。』

*1567年10月26日付け、小値賀発、モンティ神父の書簡

Jap.Sin 6, f.207~210

『最初のミサの後、イルマン・ロレンソは我が主キリストの御誕生について説教しましたので、皆は非常に慰めを受けました。朝三番目のミサの後、皆、いっしょに食事ができるように準備されていました。』

1567年（永禄10）（ロレンソ41歳）

ロレンソ、モンティ神父と共に五島で布教活動に従事する。

6月頃

口之津にいるトーレス神父は、ロレンソを五島から引き揚げさせ休息を与えた。その後モンティ神父も五島から呼び戻された。

ロレンソは豊後府内で活動している、フィゲレイド(Melchor de Figueiredo)神父を助けるために、府内に送られた。

五島には、ヴァリャレジオ（Alexandro Vallareggio）神父とイルマン・ジャコメ・ゴンサルベス（Jacome Goncalves）が任命され赴任した。

1568年（永禄11）（ロレンソ42歳）

ロレンソ・5度目の府内滞在（1568年2月頃～1569年2月頃）

2月頃

ロレンソ、豊後に戻る。メルキオール・フィゲレイド（Melchior de Figueiredo）神父と共に約一年間、豊後で布教活動に従事する。府内教会では、何時もの通り説教をして受洗前の信徒

達に教理を教える。ロレンソは性格や文化の相違を乗り越えて、だれとでも、どのような時でも、互いの融和と協力を、神のための仕事の土台としていた。

『イルマン・ロレンソ、日本人、世間的には身分の低い人で、片目だけ少し視力がありました。社会では盲人の仕事、すなわち琵琶を弾いたり日本の昔話を語ったりしていました。非常に活発な人で優れた雄弁家でした。』

*Melchior de Figueiredo S.J., ゴア、1593年11月20日、Jap.Sin 12 I,f. 132~138v

京都における第2の時代・1569年～1587年

1569年（永禄12）（ロレンソ43歳）

3月

ロレンソ、再度、五畿内の布教を任されて堺に赴く。ルイス・フロイス神父と共に布教に従事。この後、ロレンソが豊後の地に戻ることはなく、ロレンソと豊後との関係はこの年が最後となった。以後、ロレンソの活動は五畿内を中心に行われている。

1565年（永禄8）5月、松永久秀は三好三人衆と組んで將軍足利義輝の邸宅を急襲し暗殺した。暗殺により將軍足利義輝の保護を教会は失った。都地方はあちこちで紛争が起こり混乱を極めていた。更に正親町天皇綸旨によって宣教師たちは京都を追放され堺の日比谷了慶宅に避難した。

1568年（永禄11）9月、織田信長は暗殺された將軍足利義輝の弟・義昭を擁して京都に入り三好三人衆を阿波徳島に追い落とし、松永久秀を降伏させた。

1569年（永禄12）4月、ヴィレラ神父の後任としてルイス・フロイスが都地区の責任者となった。フロイスは高山飛騨守ダリオと親しい和田惟政との尽力により入京して織田信長、將軍足利義昭に拝謁した。4月8日付けで信長より京都での布教と居住の許可の朱印状と4月15日付けで將軍義昭の制札とが出された。

4月20日、信長は定宿の京都妙覚寺で、フロイス神父とロレンソをキリシタン宗門に反対の政僧・日乗上人とを面前で宗論させた。内容はデウス論、不可視・不滅の靈魂論に及んだ。論争に敗れた日乗上人はキリシタン反対運動をはじめた。織田信長は一貫してキリシタンを保護した。7月、日乗上人と再度、宗論をする。1570年（元亀元）7月、日乗上人、信長の側近より遠ざけられる。

1572年（元亀2）11月、岐阜を訪れた日本布教長カブラルも信長から歓待されたし、1574年（天正2）3月、再度上京したカブラルを信長は引見している。

1575年（天正3）都の布教長に就任したオルガンティノ、フロイス、高山飛騨守・右近父子、結城弥平次、池田丹後守、ジュスト・メオサン、清水里安等の五畿内の主だったキリシタンたちが、京都四条坊門姥柳町に3階建ての南蛮寺を起工した。1576年（天正4）7月21日、サンタマリア御昇天の祝日に未完成のまま献堂式を挙げて、1577年（天正6）春に教会堂は竣

工した。1581年（天正9）には隣接家屋を購入して敷地を拡げ、蛸薬師通りと室町通に門を設けた。

織田信長は、近江の安土に1576年（天正4）1月から築城を開始し、2月に安土に移住した。1579年（天正7）5月、天守閣が竣工、1580年（天正8）3月、オルガンティノの要請により安土城下の埋立地（現安土町豊浦新町小字ダイウス）を造成して、同年4月に与えた。

安土教会は和風木造3階建ての教会で、修道院と3階はセミナリヨが開設された。

1581年（天正9）2月、巡察師ヴァリニャーノは京都本能寺で信長に謁見した後、3月、安土城を訪問、6～7月安土に滞在した。信長はヴァリニャーノが安土を離れる際に安土城と城下を描かせた屏風を送った。屏風は教皇グレゴリオ13世に4人の少年遣欧使節が届けた。

1582年（天正10）6月2日、信長は京都本能寺で明智光秀により殺害された。

1583年（天正11）高山右近と共に大阪に羽柴秀吉を訪ねる。右近の友人に説教、小西行長を教化する。ロレンソ（57歳）精力的に五畿内で布教する。

1584年（天正12）～1585年（天正13）五畿内での布教は順調に発展する。

1586年（天正14）5月、コエリョ神父を伴い大阪城に豊臣秀吉を公式訪問、秀吉より厚遇される。ロレンソ（60歳）

ロレンソの晩年・1587年～1592年

1587年（天正15）（ロレンソ61歳）

7月25日

豊臣秀吉による九州平定が終わり、博多箱崎において、豊臣秀吉により出された『伴天連追放令』の後、ロレンソは平戸に避難している。平戸から長崎にいつ移ったのか定かではない。

1588年（天正16）（ロレンソ62歳）

ロレンソは、ヒル・デ・ラ・マタ（Gil de la Mata）神父と共に、長崎の古賀の教会で布教活動に従事している。

『それのみか彼が有徳の人であることは、彼を傍に置いている司祭たちがつねに大いに景仰してやまぬところであり、今でも（彼はすでに65歳を超え、日本のイエズス会で40年間堪えてきた苦労のために、もはや病み、かつ弱っているけれども）下の地方のドン・バルトロメウ（大村純忠）の領内におり、必要ならば日中、二、三回はキリシタンや異教徒たちに説教をし、福音の説教師としての職務にいそしんでいる。』

*ルイス・フロイス著『フロイス日本史』第6巻 大友宗麟編I

第4章（第I部5章）54～56頁

司祭たちが山口に帰還した後、この地で成果を生み始めた次第

1589年（天正17年）（ロレンソ63歳）

古賀教会でヒル・デ・ラ・マタ神父と共に布教。

高齢と病気のために、長崎の修道院に隠居する。

『大分疲れが出て、弱くなった時には、すでに 64 歳をこえていたから、今の迫害には都の神父たちと一緒に、下の地方に下った。ここで、我が主は、彼に自分の霊魂についてゆっくり考える時間をお与えになった。とりわけこの最後の年には、自分を神に捧げ、種々の重病にも耐え忍んだ。

ついに、非常に衰弱し、骨と皮ばかりになった。それなのに、神が自分に大きな御恵みをお与えになっていると言っていた。それはこの様に痛みも苦しみもなく、次第に終わりに近づいたのである。しまいには衰弱のため話すのが困難になったが、たいへん親しまれていたのも、たえずいろいろな人を見舞いに來ていた。それである日、巡察師に、自分が望んだり、また我が主に祈ったりすることは、死ぬ時に部屋にだれもいないことであるといった。それは、尋ねられると答えるのが非常に苦しかったし、またその時に返事をしないことも苦痛であった。それ以上に、望みどおり神に祈るには、その見舞いは妨げとなる。また臨終の時イルマンたちがみんなて手助けするのに、いろいろなことを大声で勧めれば、逆に妨げになることを心配していた。そして、祈ったように神から叶えられた。』

*Luis Frois S.I., “Apparatos para a Histpria Ecclesiastica do Bispado de Japam”

Biblioteca de Ajuda, Lisboa Codex 49, IV, 57, cap. 35

1592 年（文禄元）（ロレンソ 66 歳）

2 月 3 日 ロレンソの死去

長崎の修道院で死去した。66 歳。

『毎週必ず修道院の小聖堂へ椅子にすわったまま運ばれて御聖体拝領する習慣があったが、この日、食事の後、あるイルマンとひとりの信者が話している時、用があるからちょっと部屋からでると彼らに言い、いつも彼に仕えているひとりの小者呼び、起き上がるのを手伝うように頼んだ。ベットにすわり小者が腕をかかえた時には、ロレンソは「イエズス」の聖なる名を呼んで、一瞬の間に静かに亡くなったので、小者さえ、彼がこの世を去ったとは気が付かなかった。その後しばらくして、ロレンソが死んでいることに気がつき、外で待っていたイルマンを呼んだ。イルマンは部屋に入ると、そのまますわって小者にかかえられて死んでいるロレンソを見つけた。亡くなったのは 1592 年 2 月 3 日のことであった。家の人もよその人もみんな非常に悲しんで彼を偲んだ。』

*Luis Frois S.I., “Apparatos para a Histpria Ecclesiastica do Bispado de Japam”

Biblioteca de Ajuda, Lisboa Codex 49, IV, 57, cap. 35

『イルマン・ロレンソ、日本人、肥前國出身、66 歳。イエズス会では 29 年を過ごした。山口で聖パードレ・マエストロ・フランシスコより洗礼を授けられ、同宿として受け入れられた。1563 年、コスメ・デ・トーレス神父によって入会を許され、都の地方の主だった信者を導

いたり、日本では非常に効果的な布教の活動をしたりして、1592年2月3日、長崎で没した。』

*"Monumenta Histrica Japoniae I, Textus Catalogorum", proposuit Joseph F. Schutte S I.,
Roma 1975, p.339